

桃太郎、瀬戸内海を渡る —山行き桃太郎の伝播を中心に—

永峰 一樹

(手塚 恵子ゼミ)

目次

はじめに

はじめに

第1章 現代における昔話の中での桃太郎の位置

第2章 桃太郎の生い立ち

第1節 読み本から見る隆盛

第2節 猿か桃か

第3節 教科書桃太郎の拡散

第3章 岡山といえば桃太郎

第1節 吉備路の桃太郎

第2節 吉備津彦の伝説と桃太郎

第3節 むかしむかしの昭和5年

第4章 山行き型桃太郎

第1節 山行き型桃太郎紹介

第2節 笑い話としての山行き型桃太郎

第3節 教科書桃太郎の影響

第5章 山行き型桃太郎の本拠地

第1節 中国地方山行き桃太郎の分布

第2節 大清正

第3節 大清正・類似昔話の分布

第4節 四国地方の山行き桃太郎の分布

第5節 話の内容からみる違い

第6節 山行き型桃太郎の伝承基盤

第6章 話される桃太郎

第1節 語りの場・話の場

第2節 岡山県山行き型桃太郎の場合

第3節 四国地方の山行き型桃太郎の場合

第7章 岡山・四国間の交流

第1節 交流の機会の一例としての金毘羅信仰

第2節 新見市一円の金毘羅信仰

第3節 参詣に行った記録

おわりに

注

引用および参考文献

私の育った岡山県は、「桃太郎の県」として全国にPRをしている。JR岡山駅後楽園口前（東側）には、二代目桃太郎像が設置されているし、岡山桃太郎空港にも2021年に初代桃太郎像が復活プロジェクトにより設置された。彼等は陸と空の玄関口で、岡山県のシンボルとして存在している。桃太郎と鬼をモチーフにした岡山県公式マスコットキャラクター「ももっち」「うらっち」は、掲示板・パネル・ウェブサイトと各所で活躍し、宮沢賢治の如き東奔西走ぶりを見せている。他にも、岡山名物「きびだんご」の元祖として知られる廣榮堂のきびだんごのパッケージに桃太郎が印刷されている等、岡山県と桃太郎は密な関係性であるといえる。その背景には、岡山県吉備路に伝わる鬼退治伝説が関係している。

そんな岡山県には、あまり一般には普及していない桃太郎昔話が存在している。それが、「山行き型」と呼ばれる桃太郎である。表舞台に登場することがほとんどないこの桃太郎だが、実は岡山県北西部を中心としてその伝承は瀬戸内海を越えた四国地方にまで渡っている。

本稿では、一般に流布している岡山駅前桃太郎ではない、もうひとりの桃太郎である「山行き型桃太郎」を取り上げ、桃太郎昔話を捉えなおしたい。

第1章 現代における昔話の中での 桃太郎の位置

まず、一般に流布している桃太郎について紹介する。現代において、「通常の」と冠したとしても納得される桃太郎の筋は、

①あるところに子供のいないお爺さんとお婆

さんが住んでいた。

- ②お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行く。
- ③洗濯をしていると川上から桃が流れてくる。
- ④桃を家に持って帰り、切ると中から男の子の赤ん坊が出てくる。
- ⑤桃太郎と名付けられた赤ん坊は成長し、鬼ヶ島へ鬼退治へ行くと志願する。
- ⑥両親は黍団子を持たせて送り出す。
- ⑦道中、猿・犬・雉に黍団子を与え、お供にする。
- ⑧鬼ヶ島に到着し、鬼を討伐する。
- ⑨宝物を獲得する。めでたし、めでたし⁽¹⁾。
(古里紅子 まんが日本昔ばなしデータベース「桃太郎」online: index.php?lid=1159)

という流れでほとんど間違いはないだろう。このような桃太郎は、子供向けの読みものとしてよく認知されており、その認知度はかなり高いと言える。

「日欧の昔話の認知度 (1) 一短期大学生の学年別検討一」(向田久美 2012) には、駒沢女子短期大学の、保育専攻をしている学生 224 名を対象として行った、日本の昔話 81 話とグリム童話 63 話についての認知度のアンケート調査結果がまとめられている。これによると日本の昔話の認知度 1 位は桃太郎という結果になっていた⁽²⁾。

また、「昔話の認知度について一アンケート調査の分析を中心に一」(皆川晶 2018) で行われているアンケート調査でも、近畿大学九州短期大学保育科の 1 年生 65 名を対象とした昔話の認知度についての調査および保育科 1 年生 65 名、2 年生 54 名を対象とした日本昔話のあらすじについての調査の両方で、桃太郎は 1 位の認知度であるという結果が出ている。2012~2018 年に大学生だった年代では、昔話のなかで桃太郎の知名度は高かったことがわかる。

最近の子供への認知度については、「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態—1990 年からの 30 年間の変化—」(水野智美 徳田克己 2021) が検討している。この調査は 2020 年に行われ、愛知県、茨城県、埼玉県、東京都内にある私立の幼稚園、認定こども園等に通っている幼児 642 名と

その保護者を対象とし、1990 年、2000 年、2010 年の調査とほぼ同一の内容で調査を行うことで、1990 年から 10 年毎の子どもの童話・昔話離れ現象の変化を確認している。この論文の、調査結果を図示したもののうち、童話・昔話絵本の家庭内所持率、読み聞かせ経験率、DVD 所有率、映像視聴経験率をまとめたものを参考にする。

1990 年~2020 年にかけての童話・昔話絵本の普及率は全体をみるとかなり減少しているが、個々の割合別でみていくと、桃太郎が各年代ごとの 1 位を常に記録している (水野智美 徳田克己 2021: 13)。

1990 年の桃太郎絵本所持率の高さから、駒沢女子大学と近畿大学九州短期大学で行われた調査結果と併せて考えれば、概ね当該世代全体の認知度は大きな違いはないと考えられる。読み聞かせ経験に関しては、1990 年と 2020 年を比べると 90% から 60% と 30% 減少しているが、年代別で他の絵本と比べてみると常に桃太郎が 1 位である。DVD 視聴率に関しては、日本の昔話の中では桃太郎が 1 位であるが、日本国外の昔話も含めて見ると、童話「白雪姫」・「シンデレラ」に次いで 3 位となっている⁽³⁾ (水野智美 徳田克己 2021: 14)。

これらの調査結果から、昔話離れが指摘される現代においても桃太郎は、かなり普及率の高い昔話という位置づけをすることができる。

第 2 章 桃太郎の生い立ち

第 1 節 読み本から見る隆盛

家庭内の昔話絵本離れが指摘される現代においてもなお高い普及率を誇る桃太郎だが、安定している認知度・普及率の高さに反して、実はあまり生い立ちのよくわかっていない昔話でもある。『桃太郎像の変容』(滑川道夫 1981: 3) に、「桃太郎がいわゆる口承の昔話として成立した時期は、およそ室町末期 (1550-1630) 特にいわゆる戦国時代から江戸初期にかけて成立したとみるのが、ほぼ定説と言っていいだろう」とあるように、確実な成立年は判明していない。

享保 8 年 (1723) の豆籾本『もゝ太郎』が年代の判明している最古の桃太郎であることから、桃太郎が文字の昔話として成立した時期は享保年間

とされている。豆雛本とは、雛祭やままごとに用いた小型の赤本の一種で、江戸中期の延宝から享保にかけて流行した子供向けの絵本である (Japan knowledge Lib 『日本国語大辞典』赤本 online: <https://sslvpn2.kuas.ac.jp/proxy/62204b23/https/japanknowledge.com/lib/display/?id=1001000010870>)。表紙が赤いところからこのように呼称され、その内容にはお伽話物が多い (Japanknowledge Lib 『デジタル大辞泉』赤本 online: <https://sslvpn2.kuas.ac.jp/proxy/62204b23/https/japanknowledge.com/lib/display/?id=2001000130300>)。

この豆雛本『もゝ太郎』の内容は、「やまとの名品」(天理図書館 2011)によると、「昔々、ある所に爺と婆有ける。爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に」で始まり、流れてきた桃を食べて若返った爺と婆が子供をもうける。その後、忽ち成長した桃太郎が猿・雉・犬をお供に鬼ヶ島へ向かい、鬼から宝物を得るというものである。

川上から流れてきた桃から生まれる「果生型」とは異なり、桃を食べて若返った爺と婆が子供をもうけるという桃太郎は「回春型」という名前でも分類されている。「昔話『桃太郎』の変転—『再版桃太郎昔話』の諸問題を中心に—」(山崎舞 2018: 59)には服部康子氏の研究から「草双紙系統の文献の大部分と口承話の一部は回春型であり、口承話の多くと明治以降の話、江戸期の一部の話は果生型である」という論を引用している。また、名村道子氏の研究をひいて「江戸後期には果生型が専らであったことを指摘している」と述べている。さらに、『燕石雑志』の「桃太郎」の項をひいて文化年間には遅くとも回春型・果生型が同時に存在していたことも指摘している。

享保8年(1723)に出版された本の桃太郎について『桃太郎の発生』(花部英雄 2021: 93)では「文久年間(一八八一—一六四)までの一八〇年の間に、八十二点を超える赤本、黄表紙本等の草双紙が出版されている」という。これほど人気を誇った「桃太郎」が、享保以前にはその名前が出てこない。江戸の出版文化の隆盛の中に突如現れ人気を博したと言える。」という説明をしている。

文久年間までの82点を超える本については、「昔話 桃太郎の変転—『再版桃太郎昔話』の諸問

題を中心に—」(山崎舞 2018: 57~58)の表2に纏められており、山崎氏が確認した桃太郎本が年代ごとに35作品、年代不詳で19作品を確認することができる。また、「ArtWiki」(立命館大学アート・リサーチセンター「ArtWiki」online: 昔話桃太郎 #)にも【桃太郎作品一覧】のページに纏められている。下図は、サイトの画面である。



図1 立命館大学アート・リサーチセンター「ArtWiki」昔話桃太郎【桃太郎作品一覧】

江戸時代の桃太郎本は、豆雛本『もゝ太郎』と同じ内容のみを出版しているわけではなかった。例えば「桃太郎後日譚」という本は、鬼退治後の桃太郎一行を描いたものである。(立命館大学アート・リサーチセンター「ArtWiki」online: 『昔話桃太郎』続編)。「ArtWiki」に立項されている『桃太郎後日譚』によると、

「鬼ヶ島征伐に成功した桃太郎は、宝物を持ち、犬猿雉と心優しい白鬼を連れて村に帰ってくる。桃太郎は十六歳になり元服。白鬼も角を切り落とし元服し、鬼七と改名。元服姿の似合う白鬼を見て猿も真似して元服し、猿

六と改名。元服した猿六は、しつこくおふく(下女)に言いよるが悉く拒否される。おふくと鬼七は恋に落ち、やがて密通してしまう。その現場を猿六が目撃し、奉公人同士が密通することは罪にあたと告げ口をする。桃太郎は自分の恋が叶わないからといって告げ口をした猿六も同罪とした。桃太郎は罰として、金が出る小槌でおふくと鬼七に十兩ずつ、猿には罪が軽いのでと二百文うちだし、同じく暇を出した。鬼七・おふく夫婦はその金で店を出し幸せに暮らす。白鬼の許嫁だと鬼ヶ島からやってきた鬼女姫が現れ、おふくは怒りのあまり角を生やし、大蛇の姿になる。二人の女に追われる鬼七は田舎寺に逃げ込む。「夫を殺しに行く」と言うおふくを鬼女姫は止めるが、失敗。鬼女姫はそこで自害。そこで桃太郎が登場し、鬼七を殺しに行くおふくを切り殺し、猿六のことも踏み殺してしまう」(立命館大学アート・リサーチセンター「ArtWiki」桃太郎後日囃 online:『昔話桃太郎』続編)

という内容である。

ほかにも、桃太郎昔話に酒呑童子退治譚を縫い合わせたものもある。「国立国会図書館所蔵『桃太郎大江山入』」(新井真一 2016)によると、

「あるとき桃太郎は伊勢参りを思い立ち、両親から黍団子をもらい、旅に出る。道中では犬、猿、猪、熊を配下に加え、念願の伊勢参りを果たす。伊勢参りを終えた桃太郎一行は、夢の中で伊勢の神から、ひつてん童子討伐の依頼を受ける。猿の故郷である比叡山坂本にて、山伏姿に変装し、ひつてん童子の住処である大江山へと出立する。道中では、坂田公時から力を授かり、大江山では囚われの身である雉子・兎と遭遇する。ひつてん童子邸では酒宴が催され、ひつてん童子を酩酊させ、寝込みを襲い、鳥類・畜類を襲わないことを約束させる。桃太郎はその功績から多くの宝物を得る」

という内容である。

例に挙げた2つの桃太郎本の存在から分かるように、江戸の出版文化によって隆盛した桃太郎は、他の話と融合させたり続きの話を書いたり、二次創作の動きもみられる。ここからも、桃太郎本は人気のコンテンツであったことが伺える。

他にも様々な種類の桃太郎本が登場していることから、戦国時代から江戸初期にかけて成立した口承の桃太郎に江戸の絵本作家の手が加わりバリエーション豊かになったことも、享保以降の桃太郎の隆盛の理由だと考えられる。

第2節 猿か桃か

江戸の出版文化によって隆盛したこの時期においても、桃太郎が今のような「誰もが知っている話」という形で全国に広まったわけではない。これは、『桃太郎の発生』(花部英雄 2021: 25~26)に紹介されている藤原相之介氏と喜田貞吉氏の言葉から推察できる。藤原氏は、秋田県田沢湖町出身で、「一體私の生れた地方には昔から桃太郎の昔話はなかつた(中略)北陸から出羽の沿岸方面にかけては、もう桃太郎が出現して、猿の本據たる猿ヶ島に向つて膺懲の師を向けて居る」と述べている。

徳島県小松島市出身の喜田氏も桃太郎について「小生の子供の時分には、少なくとも阿波国などでは、一向知らなかつた事に候。その代り桃太郎話の話の中の筋は、猿蟹合戦の話と混同して語り伝えられて居り候。小生らは之を「猿が島の敵対」と教へられたものにて、蟹の子が桃太郎もどきに天下一の吉備団子を腰に付け、栗(卵にあらず)や、剪刀(はさみ)や、挽臼(立臼にあらず)が犬、雉、猿の代わりにそれを半分づゝ貰つて家来になるといふ筋に出来て居り候」と述べている。

これらの記述から、桃太郎本出版の盛んな江戸のみならず、北陸から出羽の辺りには既に桃太郎という固有名詞が存在しているものの、伝承の力は少し弱かったようだ。徳島県小松島市に関しても同じで、桃太郎よりも猿ヶ嶋の昔話の方が強く伝承されていたことが分かる。

あくまで個人の、しかも幼少の頃の話なので、これだけで徳島県全域に桃太郎が伝承されていなかったと結論づけることはできない。しかし、現代のように「みんなが知っている桃太郎」にはあ

と一歩及んでいなかったようだ。

ちなみに、藤原氏の「猿ヶ島に向つて膺懲の師を向けて居る」や喜田氏の「猿ヶ嶋の敵討」は、「猿ヶ嶋敵討」と呼ばれる昔話を指していると考えられる。「『猿蟹合戦』の異伝と流布—『猿ヶ嶋敵討』考一」（沢井耐三 2011）によると、この話は「猿蟹合戦」のひとつの定型の話で、上方に広く流布したという。猿に親蟹を殺された主人公の蟹太郎が、黍団子を用いて栗・臼・鉢をお供にし、敵の猿を討伐するという内容だ。沢井氏はこの文久年間に刊行された『猿ヶ嶋敵討』話と通常の猿蟹合戦とを比較し、5つの特徴（相違点）を挙げている。そのなかで「②黍団子を与えて、家来にしている」「⑤子蟹が桃太郎のように振舞い、敵討ちを主導している」といった点に特徴が見られる」（沢井耐三 2011: 48）と述べているように、この話の中には桃太郎の片鱗が見て取れる。同論文中では他にも、正徳5年（1715）の久城春台の書画と伝えられる絵巻物『猿ヶ嶋敵討』について、蟹太郎が竜宮城へ行く等「話はかなり脚色されているが、握り飯交換の場はなく、助っ人達に黍団子を与え、一斉に切り込んでいるという描き方からすれば、「敵討」系の話をもとにしていることが明らかであろう」と述べている（沢井耐三 2011: 49）。

花部氏の紹介した2人の発言と沢井氏の論文とを合わせて考えると、猿ヶ嶋敵討は上方・北陸にまで分布しており、伝承地によっては桃太郎よりも強く伝承されていたということが分かる。また、享保8年（1723）よりも前に桃太郎の片鱗を持った『猿ヶ嶋敵討』絵巻が存在していることは、豆籬本が桃太郎の発生源ではないことを示すひとつの資料となり、「戦国時代から江戸初期にかけて成立した」という定説とも矛盾しない。

第3節 教科書桃太郎の拡散

江戸末期から明治初期の段階では、桃太郎よりも猿ヶ嶋敵討という昔話の方が一般的であった地域も存在したことがわかった。では、桃太郎が現代のように「最も知名度の高い日本の昔話」といってよい程広がったのはいつ頃だろうか。

それは、明治6年（1873）に施行された学制が関係している。学制とは、明治5年（1872）8月

3日全国に公布した、日本最初の近代的学校制度を定めた法規である。封建時代の儒教的為政者教育の理念を否定し、四民平等の原則にから全国民に自立自営の能力を養う実学教育を学校教育の目的とするものである。

学区は全国を8大学区、1大学区を32中学区、1中学区を210小学区に区分し、全国に5万3760小学校の設立が予定されていた（JapanKnowledge『日本大百科事典 学制』）。「日本に開ける小学校数と学校規模の変遷について」（大田邦郎 2017）によると、実際の小学校数は計画通りにいかなかったものの、明治10年（1877）には約25000校が全国に設置され、以降25000校付近を保っていた。

この小学校の教科書に明治20年（1887）に桃太郎が採用され、以降学校教育で使用されたことによって、全国的に「通常の桃太郎」の概念が生まれることとなった。教科書に収録された桃太郎を、『桃太郎像の変容』（滑川道夫 1981: 153~155）から紹介する。

第二十六課（第一学年）（題名なし）

むかし、ぢゝ と ばゝ と が 有りました。

ぢゝ は、山 へ くさかり に、ばゝ は、川 へ せんたく に 行きました。

川上 から、大きな 桃 が 一つ、ながれて 来ました。それ を 取りて 見ますと、大さう うまさう な 桃 で ありました 故、ぢゝ と ふたり で、たべやうとて、家 に もちかへりました。

ぢゝ が 山 から かへります と、桃 は、二つ に われて、中 から、かはゆらしい をとこ の 子 が うまれました。二人 は 喜んで、其 子 を 取りあげ、ゆをつかはせます と、其 子 は、たらひを たかく さしあげて、投げ出した 力に、二人 は おどろきました。

此 子 は、桃 の 中 から うまれた 故に、桃太郎 と 名 を 付けました。

第二十七課（同）

桃太郎 は、だん— 大きくなりて、まことに つよくなりました。ある 日、ぢゝ ばゝ に 向うて、『私 は、鬼がしま

へ、たから物 を 取り に 行きたい』と
いひました。

二人 は 喜んで、朝 早く 起き、べんた
う に、きびだんご を こしらへて やり
ました。桃太郎 は 其 だんご を こし
につけて、家 を 出立し、山 を こえ
て ゆきました。

少し 行く と、川 の むかふ から、犬
が 来て、「あなた は、どこ へ お出な
されます か。又 おこし に 付けた の
は、何 で ござります。」

「われ は、鬼がしま へ 行く の で こ
し に 付けた 物 は、日本一 の きび
だんごだ。」

「一つ 下され、お供 いたませう。」

桃太郎 は、だんご を やり、犬を 供 に
つれました。次 に 猿 が まゐり、其 次
に 雉 が 来て、犬 と おなじ やう
に、供を ねがひ、だんご をもらひました。

第二十八課 (同)

桃太郎 は、犬 猿 雉 を 供 に つれ、
鬼がしま へ わたりて 見る と、鬼 は、
門 を 閉ぢて 入れませぬ。それ 故、雉
は、一ばん さき に、門の やね を と
びこえ、次 に 猿 は、へい を のりこ
えて、内 から 門 を 開きました。

そこ で、桃太郎 は、犬と 一しよに、門
の 内 に おし入り、多く の 鬼 と
たゝかひ、つひ、におく まで せめこみ
ました。其 時、大しやう の あかんど
うじ は、太い てつの ぼう を 持ちて、桃
太郎 に 打ちて かゝると、桃太郎 は、
受けながして、くみうち を はじめ、つひ
に あかんど うじ を しばりあげて しま
ひました。

鬼ども は おそれて、かうさん を ねが
ひ、かくれみの、かくれがさ、打出 の 小
づち、さんごじゆ など の、たから物 を
出しました。桃太郎 は、それ を 車 に
つませ、「これ は、たれ の 手車、桃太郎
どの の 手車」と はやさせ ながら、ぢゝ
ばゝ へ の、みやげ に 持ちて かへり、
犬 猿 雉 にも 分けて やりました。

(滑川道夫 1981: 153~155)

これが、教科書に初めて記された桃太郎である。
現代の桃太郎の紹介として挙げた話の筋とほとん
ど共通しており、やはり現代の絵本などに採用さ
れている桃太郎の基盤となっていることが分かる。
滑川氏はこの教科書桃太郎の鬼ヶ島へ宝物を取り
にという部分に注目して、「民話的な面影を伝えて
いる」と述べている(滑川道夫 1981: 156)。

明治33年(1900)の『尋常小学修身訓 巻1』(金
港堂書籍株式会社編 1900: 69 国立国会図書館
次世代デジタルライブラリー)では、桃太郎を教
える目的として、「此の課は義勇孝行の徳を養う主
とす」とあることから、教科書桃太郎は採用を
重ねるうちに、義勇心を学ばせるため鬼退治を理
由にし、鬼ヶ島へと侵攻していると考えられる。こ
のことから、「宝物を取りに行きたい」という個人
的な、俗物的な理由で鬼退治に行く義勇心の薄い
明治20年(1887)の教科書桃太郎について滑川氏
が、教科書的ではなく「民話的な面影を伝えている
」と述べている理由が理解できる。

教科書に採用するにあたって当時の文部省は
「児童ノ遊戯、或ハ昔話等ノ如キ、意義を解シ易ク、
趣味ノ覚リ易キモノヲ選ビ、成ベキタケ、一地方
ノ方言ト、鄙野ニ渉レルモノトヲ除キ、談話体ノ
言辞ヲ以テ之ヲ記シタリ……」(滑川道夫 1981:
152)という取り決めをしている。滑川氏は、「昔
話は「意義の解し易」いものと思われていたとい
うことは(中略)当時もまだ「祖父母の物語」と
して家庭生活にあって伝承されていたから、なじ
みやすくまた、わかりやすいという通念が形成さ
れていたのであろう」(滑川道夫 1981: 152)と述
べている。

また、「一地方の方言」を避けて文語標準体で記
述するようにという取り決めから、当時既に日本
各地で伝承されていたのだらうという予測がで
きる。花部氏の紹介していた2人の証言と合わせて
考えるのと、桃太郎が全く認知されていない地域
もあるが、それでも各地方で伝承されていること
の方が多く、「祖父母の物語」として家庭生活に
あって伝承されていた昔話であると言える。また
「鄙野ニ渉レルモノトヲ除キ」というところから、
低俗・下品・内容が教育向きでないという理由で

採用されなかった桃太郎たちが当時既に語られていたということも予測できる。本稿で取り上げている、怠け者でなかなか山仕事に行こうとしない「山行き型桃太郎」は、当時認知されていたとしても、鄙野なモノと判断されていたらと思うられる⁴⁾。

教科書への採用が明治20年(1887)で、以降全国に画一化された桃太郎が定着したとするならば、それ以前、例えば例に挙げた明治4年(1871)に生れた喜田氏が幼少の頃の徳島県のように桃太郎が定着していない地域があっても矛盾はしない。

滑川氏は『桃太郎像の変容』で「第二次世界大戦以前に子ども時代を過ごした大部分の親たちの桃太郎のイメージは、教科書桃太郎によって影響されるといってもいい。教科書の桃太郎教材を繰り返し読まされ、読解指導を受けて定着しているから、ほかの様々な桃太郎民話に接しても、それは「まちがいだ」ときめつける人たちがいる。」(滑川道夫 1981: 221)という指摘をしている。

また、明治から時代は少し下って大正～昭和期を生きた人が、桃太郎にどのようなイメージを持っていたかが見られる資料として次のものがある。『全国昔話資料集 23 土佐昔話集』(桂井和雄編 1977: 358)には、高知県高岡郡佐川町の『佐川町誌』と『戸波村誌』があげられている。これによると、『佐川町誌』には、「当町ニ於テ特ニ伝ハリタル童話ナシ普通ニ行ハルモノハかち―山舌切雀桃太郎等ニテ別ニ記スベキモノナシ」とあり、『戸波村誌』には、「本村特有の童話なるものなし唯世間普通なるものの中、かち―山、猿蟹合戦、桃太郎、大江山、舌切雀、鬼が島、金太郎の話等最も多く行わるゝものなり」という記述がある。

同じような考えがあったことは『柳田国男未採昔話聚稿』(野村純一 2002: 309)に、新潟県水沢村の昔話について「桃太郎猿蟹報讐舌切雀かち―山等普遍的のものは略之猶二三話あり追報すへし」という記述があることから分かる。

このことから、大正期にはすでに桃太郎は全国で一般的な昔話として認識され、採録地においては、当地の特色を現わさない普遍的な昔話という扱いを受けていたことがわかる。ここからも、小学校教育の教科書で桃太郎が使われたことによって、全国に普遍的な桃太郎が認知されたことが考

えられる。

以上をまとめると、室町時代末期～江戸初期にかけて成立したとされる桃太郎は口承の世界で存在していたが、享保8年(1723)の出版をきっかけに文字の世界へと進出し、以降は口承と文字が並立して継承されることになる。様々な桃太郎を文字の世界に生み出しながら隆盛していった桃太郎が画一化され、現在のように普遍的な桃太郎が世の中に登場したのは明治20年(1887)以降国定教科書に採用されたことによる。教科書桃太郎が全国に周知されたことは、「桃太郎は当地の特色を示さない普遍的なもの」ととらえる人を生み出すきっかけにもなったと考えられる。教科書桃太郎が明治20年(1887)から、鬼退治の動機など学習の狙いに伴って多少の変化はするものの、その大筋を変えることなく採用されつづけた結果、「通常の桃太郎」として現在(平成・令和)まで鬼退治型桃太郎が受け継がれる土壌をつくったといえる。

第3章 岡山県といえば桃太郎

第1節 吉備路の桃太郎

教科書の登場をきっかけに、桃太郎は一般に流布する昔話となった。そんな桃太郎昔話を「我が町の昔話」とする地域が日本にはある。そのうち特に熱心な活動を行っているのが、岡山県である。

現在、桃太郎伝説発祥の地として全国的に有名なのは岡山県の吉備路一帯である。この地域には鬼退治の伝説が伝承されており、これが桃太郎昔話の原型であるという説が存在することから、岡山県は桃太郎伝説の発祥の地として有名になっている。

文化庁が平成27年(2015)から行っている「日本遺産」事業にも、岡山市・倉敷市・総社市・赤磐市の連名で申請され『桃太郎伝説』の生まれたまち おかやま ～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～』というタイトルで登録されている。

日本遺産とは「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として文化庁が認定するものである。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけで

はなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ること」を目的としていることから、岡山県は吉備の鬼退治伝説と桃太郎伝説を地域の歴史的魅惑・特色として捉えて発信しているといえる。

第2節 吉備津彦の伝説と桃太郎

ここで取り上げられている鬼退治とは「温羅退治の伝説」や「吉備津彦の温羅退治伝説」と呼ばれており、吉備津彦命が吉備に住んでいた温羅という鬼を退治するという内容である。以下に、日本遺産ポータルサイトに掲載されている説明を引用する。

その昔、岡山（吉備）平野が吉備の兎島に囲まれた内海だったころ、人の身の丈をはるかに超える温羅と呼ばれる鬼は、平野を見下ろす山の上に城を築き、村人を襲い悪事を重ねていた。大和の王から温羅退治の命令を受けた吉備津彦命は、吉備の地に降り立ち、吉備の中山に陣を構え、その西の小高い丘の頂には温羅の矢を防ぐ巨石の楯を築いた。弓の名手であった命は、岩に矢を置き温羅に向かって矢を放つ。温羅も応戦し城から矢を放つが、互いに放った矢は何度も喰い合って落ちていった。しかし、命が力を込めて放った矢は、ついに温羅の左目を射抜く。温羅の目からは血が吹き出し、川のように流れたという。たまたま雉に化けて逃げる温羅を、鷹になった命が追う。温羅は雉から鯉に化けて血の流れる川に逃げたが、命は鷹から鵜となり、鯉を喰い上げ、見事に温羅を退治し、その首を白山神社の首塚にさらした。

これら伝説の舞台は、それぞれ「鬼城山」、「吉備の中山」、「楯築遺跡」、「矢置岩」、「矢喰宮」、「血吸川」、「鯉喰神社」、「白山神社の首塚」として、現在も語り継がれている。また、温羅が生け贄をゆでた鬼の釜、命が空を移動するために使った乗り物など、伝説ゆかりの道具もこの地に残っている。

温羅を退治した吉備津彦命は神として祀られた。吉備津神社と吉備津彦神社は、命が陣を構えその墓がある吉備の中山の麓にあり、吉

備津神社には、鳥が翼を広げる姿に見える屋根の巨大本殿をはじめ、約400mもある長大な回廊や650年以上前の門などの建造物が現存し、本殿の北東部の良御崎宮では温羅も祀られ、温羅の顔を思わせる鬼面も伝わっている。

過去に災いをもたらしていた温羅であったが、やがてこの地の吉凶を告げる使いとなった。命がはねた温羅の首は、夜になると不気味なうなり声を上げたため、命は御釜殿の釜の下深くに埋めたが、それでもうなり声はおさまらなかった。ある日、命の夢に温羅が現れ、自分の妻がこの釜を使って米を炊くようにすれば、自身が命の使いとなり釜の音で世の吉凶を占うと告げ、命は温羅の言うとおりにしたという。

古くから語り継がれてきた吉備津彦命による温羅退治の伝説は後世に引き継がれ、昔話の桃太郎による鬼退治の原型となったとされる。この昔話は、川を流れてきた大きな桃から生まれた桃太郎が、村を荒らし悪さをする鬼と戦うために、道中で家来となった犬、猿、雉とともに鬼を退治する物語である。

桃太郎の名の由来となった桃は、古来より魔よけの道具として使われた。吉備の地は、晴天の多い温暖な気候に恵まれ、古くから桃が栽培されてきた。桃太郎が犬、猿、雉を従えるために与えた「きびだんご」の原料の黍は、吉備の地名に由来するともいわれ、今では岡山土産の代表となっている。また、桃太郎の家来の犬、猿、雉は、「犬飼」の名前などで、今もこの地に残っている。このような岡山の気候、風土、歴史と温羅退治の伝説とが密接に結びつき、桃太郎はこの地で生まれた（文化庁 online: ja/stories/story064）。

このようなストーリーを掲載している。温羅退治以外に、「きびだんご」の「きび」が「吉備」に置き換えられるという点や、吉備の地が桃の栽培に適していたこと、家来の三獣士のひとり「犬」を思わせる「犬飼」という苗字があるばかりか犬養毅という有名人が誕生しているため、「桃太郎はこの地で生まれた」という言葉には説得力がある

ように見える。

しかし、現在のような吉備路と桃太郎の結びつきは昭和5年(1930)をきっかけとして始まっており、日本遺産ポータルサイトから受ける「歴史ある印象」に反して、最近の出来事である。

第3節 むかしむかしの昭和5年

「伝説化される昔話—岡山の桃太郎伝説と難波金之助—」(加原奈穂子 2008)によると、岡山の桃太郎伝説は、昭和5年(1930)に「難波金之助」が著書『桃太郎の史実』で提唱した説に基づいているという。この難波の説は、そのまま使用されているというわけではなく、彼の説を大幅に簡略化し、後年の観光地化に伴って新しい解釈を付け加えられたものが現在一般に流布している。難波氏の説の概要は、「地域アイデンティティ創出の核としての桃太郎—岡山県における桃太郎伝説の事例から—」(加原奈穂子 2015: 110)で紹介されており、「桃太郎の話が吉備津彦命の伝説を原型とする「史実」であるという前提に立って、吉備津彦命の誕生から温羅征伐、その後の生涯に至るまでを、『古事記』、『日本書紀』、『吉備津神社略記』等の文献と土地の口承伝承を用いて示し、桃太郎との関連性を考証していく」というものだ。

難波氏の説が現在のように吉備路の地域のシンボルとして活用されるようになった主なきっかけは、加原氏によると吉備路の観光地化運動であるらしい。

吉備路とは、「岡山市西方に広がる、古代吉備国の中心地であり吉備国の歴史的文化的財が集中する地域—吉備津神社のある吉備の中山の辺りから高梁川東岸に至る、旧山陽道に沿った一帯」(加原奈穂子 2015: 114)で、1970年代からこの一帯が観光地として宣伝され、吉備路という名称が生まれた。

観光地化に伴い、吉備路のイメージ創りに大きな役割を果たしてきたのが、桃太郎との結びつきである。加原氏は、岡山県観光物産課や岡山県観光連盟発行の観光案内を例に挙げ、1990年代頃から吉備路について「古代吉備国の史跡」「昔ながらの田園風景」に加えて「桃太郎伝説の地」といった表現が強調されるようになったことを指摘している。(加原奈穂子 2015) ここから、吉備路の観

光に桃太郎を使用し始めたのは、かなり最近の出来事だということが分かる。

しかし、ポータルサイトの文面を見てもわかるように、この伝説の説明文からは難波金之助の名前も、起源である昭和5年(1930)という年月日も『桃太郎の史実』という言葉も全て消えている。いかにも「むかしむかし」から伝えられている伝説であるかのような態度を取っているのが、岡山県の桃太郎伝説の興味深いところだ。長い歴史に見えることで、伝説に箔がついている印象が認められる。

「はじめに」で紹介したマスコットキャラクター「うらっち」は温羅がモチーフである。「おにっち」という名前にしないことから、岡山県は吉備津彦命の伝説と融合した桃太郎をPRに使用していることがわかる。

実は昭和5年というのは、桃太郎にとってかなり印象的な年であると言える。それは、「桃太郎三大伝承地」と位置づけられた、愛知県犬山・香川県高松・岡山県吉備路がそれぞれ昭和5年(1930)に桃太郎発祥の地を世間に主張したからである。

愛知県犬山は、犬山市とその周辺地名を根拠に桃太郎発祥を提唱しており、昭和5年(1930)に、桃山にあった子供神(子守社)を犬山に移動し桃太郎神社を建立した(加原奈穂子 2008: 3)。

香川県高松は、小学校教師の橋本仙太郎が讃岐の鬼無の伝説と周辺の地名、女木島・男木島の存在を根拠に、島を拠点としていた海賊が鬼であり、吉備津彦命の弟若武彦命が桃太郎の本体であるとして提唱。昭和5年(1930)の四国民報夕刊で9月～11月まで連載された(第13会桃太郎サミット高松大会実行委員会 2014)。

本章で述べた岡山県吉備路と合わせたこの3地域が、桃太郎の発祥の地であると強く主張し、後に斎藤氏によって三大伝承地と位置付けられることになる。後の研究者によって三大伝承地と位置付けられるほど、発祥の地として定着するきっかけになった行動や説が、昭和5年(1930)内に同時に起こったというのは、桃太郎の歴史の中で特筆すべき出来事だと考える。

第4章 山行き型桃太郎

第1節 山行き型桃太郎紹介

岡山県は昭和5年(1930)の難波氏の論をきっかけとして桃太郎の県というイメージを自身に付与した。これは、一般に流布している桃太郎と吉備津彦命の伝説がリンクしているという点で印象的である。

一方岡山県にはこの他にもあまり目立つことはない、けれども特徴的な性格を持った桃太郎が存在している。それが、「山行き型」と言われる桃太郎である。

この桃太郎は吉備路の伝説と融合している桃太郎や、一般に流布している鬼退治型桃太郎とはかなり乖離した性格の持ち主である。まずは、県内で複数語られる桃太郎の中から、代表として「岡山の桃太郎」(立石憲利 2005)に紹介されている話を見てみる。

昔あるところに、爺さんと婆さんとおったそう
うで、爺さんは山へ木樵りに行く、婆さんは
川へ洗濯に行く。洗濯うしようたら、上から、
うっかりうっかり桃が流れてきて、へえから
食うてみたらうまかった。「もひとつ流れえ、
爺にやる。もひとつ流れえ、爺にやる」言よ
うたら、また、間もなく上から流れてきて、婆
さん喜んでもってもどって、そりょう櫃にい
れて、爺さんがもどるのをまっとつたら、爺
さんが、

「ああ、婆さん、今帰ったあ」

「爺さん今日不思議なことがあった。川あ洗
濯い行ったら、大きな桃が上から流れてきて、
食うてみたらうまかったけえ、『もひとつ流れ
え爺にやる』言ようたら、また流れてきたけ
え、櫃い入れてとつとるんじゃ」

せえから、行ってみたら、どうしても櫃が開
かん。せえから、ますかりゅう(まさかりを)
持って割ったら、大けな男の子が出来た。

「お爺さん、お爺さん、なんとこりゃあ思いが
けもない。家じゃあ子供がおらんのに、男の
子が、なんと桃から生まれたんじゃが、桃太
郎いう名あ付きようか」いう。

「そりゃあえかろう」

せえから、大きょうにしょうて、ある日のこ
と、近所の友達が、

「桃太郎さん、木ゅう拾いい行きましようや」

「木ゅう拾いい行きゃあええんじゃが、なんに
もこしらえが出来とらん」

せえから、あくる日、

「いま、にかわ(荷負い網)をなようる」

せえから、また、あくる日、

「今日は、行きましようや」

「今日は、にかわの髭ようむしらにゃならん」

また、翌日に、

「今日行きましようや」

「今日は、背な当ちよう(背当てを)せにゃあ
ならん」

「今日行きましよう」

言うて翌日に出たら、

「今日は、背な当てのひげむしりじゃ」

また、あくる日に出たら、

「今日、わらじゅう作らにゃあいけん」

また翌日に、

「行きましよう」

「今日、わらじのひげむしりじゃ」

せえから、また、

「今日行きましよう」

「今日は、ますかりゅう(まさかりを)とが
にゃあならん」

せえから、そのあくる日に、また、

「行きましようや」

言うたら、

「今日は、木鎌あとがにゃあならん」

せえから、そのまた翌日に出たら、

「さあ今日は、拵えがまあ整うたけえ行くかな
あ」

せえから奥山あ行って、友達は、カンカン切
る。桃太郎は、木の株の根太で、いびきばっ
かりかいて、グウグウ寝る。せえから、

「桃太郎さん、なんと帰りましようや」

いうて、

「わしゃあまた木ゅうひとつも拵えとらんの
じゃ」

「どうも、わしらがあぎょういうても(あげる
といつても)、あげるほど木ゅうこしらえとら

んのでえ」
 「ほんあら、わしゃあ、この木の株う、うがいて（掘り起こして）負うて去ぬる」
 せえから、ごっそりうがいて、桃太郎はにかわを掛けて負うてもどって、
 「ああ、お爺さんやお婆さん、いま帰りました」
 「ああ。ご苦労さまじゃったなあ」
 「なんと、こりょう、すぐ枯れとりますけえ。どこへ降ろしましょうか」
 いうたら、
 「庭へないと負うて入れえ」
 「こりゃあ、庭あ、せえでも降しゃあ、庭がとびますで」
 「そんなら、風呂場の口いでも降ろすねえ」
 「風呂場の口い降しゃあ、風呂場がとびますで」
 「そんなら、今度あ上の木小屋へ負うて上がった、木小屋へ降ろせえ」
 「木小屋がとびゃあしますがのう」
 いうてから、降れえたら、どおうっと木小屋がとんでしもうで、これが、昔こっぷりとじょうの目（立石憲利 2005: 83～86）。

これが、山行き型に分類される桃太郎である。山仕事に行くのを面倒くさがり、仕事道具が無いからという理由で何日も誘いを断る部分や、いざ山へ行っても仕事をしない部分など、鬼退治へ行く一般的な「桃太郎昔話」の主人公像とはかなり乖離している。怠け者の庶民のような描かれ方から始まる山行き型桃太郎だが、山の木を丸ごと持って帰ってくる程の怪力は、桃太郎が一般庶民ではない「主人公」であることをよく表しているといえる。

第2節 笑い話としての山行き型桃太郎

山行き型桃太郎の特徴の1つに、鬼退治を行わない場合があることが挙げられる。

鬼退治が欠落していることについて、『桃太郎と鬼—野村純一著作集第三巻—』（野村純一 2011: 136）では、「通観」（『日本昔話通観』）では笑い話「ももく太郎」（1122）に分類し、「桃太郎」とは区別している。鬼退治部分のない話は、笑い話

化の影響が見られるが、異常誕生、鬼退治の部分など「桃太郎」との基本的な違いはなく、「桃太郎」の一つの型と考えるべきだろう」という立石氏の論を紹介している。ここから、山行き型桃太郎は笑い話であることがわかる。

先ほど引用した、岡山県新見市哲西町で語られた山行き型桃太郎について野村氏は、笑い話としての特徴がより強調されていると述べている。近所の友達との「行こう」「行かない」の問答が7回行われており、この部分について、「本来は三度の反復、つまり三回の繰り返しが妥当ではないのだろうか。それがわずらわしいまでにこうして言葉が行き交うのは、そこで興趣を一段と高め、聴き手の関心と興奮を意図的に盛り上げようとするところに狙いがあったからであろう。もしもそうだとすれば、このありようは、当然、そこにいたるまでのいつか、そしてどこかで徐々に増幅したのであることが十分に考えられる」（野村純一 2011: 134）と述べている。実際に、『日本昔話通観 第19巻 岡山』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）に採録されている10話の山行き型桃太郎のうち、7度も問答をしているのは新見市哲西町川南の採録例1話のみであり、その他は3回程度が基本になっている。

また、立石氏の活動についても野村氏は触れており、その記述からも、山行き型桃太郎が笑い話と分類される理由がわかる。『桃太郎と鬼—野村純一著作集第三巻—』（野村純一 2011）では、野村氏が実際に見聞きした、立石氏の語る山行き型桃太郎とそれを聴く聴衆の反応について述べられている。

その話の席は平成10年（1998）に日本民話の会創立30周年記念祝賀会で設けられた。立石氏はそこで、山行き型桃太郎を語ったという。野村氏は、

「奥備中の「桃太郎」は久しぶりに蘇ったのではないかと思われた。わけてもその遣り取りの場面は、彼の話術をして巧みに運ばれ、会場からは多く笑いを誘って聴衆を魅了することになった。すなわち、桃太郎はなんのかのと注文をつけては一向に応じようとしない。いわばそのたびごとに頻りにごてるそこでの

様子はあたかも当の立石自身の有りようをそのまま体現しているかのような錯覚を起こさせるようで、すこぶるおかしかった。面白かった」(野村純一 2011: 135)

と述べている。ここにも、山行き型桃太郎が生きていた頃の様子が見えるだろう。「わけてもその遣り取りの場面は」というところから、山へ誘う問答の部分に笑い話としての重点のひとつが置かれていることが分かる。

第3節 教科書桃太郎の影響力

笑い話として成立していると言ってよい山行き型桃太郎だが、笑い話になってしまったために、ある弊害を招いてしまった可能性がある。桃太郎昔話の伝承の一部は、滑川氏の指摘にあるように、他の桃太郎を間違いだし決めつける人たちや、桃太郎は特有の昔話ではなく世間一般の昔話であるという考えから、まちがいとされ、駆逐されていった可能性がある。桃太郎でありながら笑い話でもある山行き型桃太郎も、そのひとつだった可能性がある。

『桃太郎昔話—みんな違って面白い—』(立石憲利編 2006: 45)で紹介されている、鬼退治型桃太郎を語った明治34年(1901)生まれの男性は、母から木の株を引き抜く話を聞いていたが、それより以前に祖父母から聞いたものが桃太郎だと思ひ、母の話は覚えていないという内容を語っている。明治34年(1901)生まれの男性の祖父母から語られたということは、岡山県新庄村には教科書の桃太郎より前から、鬼退治型桃太郎が語られていたことが分かる。同時に、母から聴いた山行き型と祖父母の桃太郎とを自分の中で比べて、「祖父母の語った方が桃太郎だ」と結論づけたのは、教科書桃太郎の影響があったからだとも考えられる。明治34年(1901)生まれなので、既に教科書に桃太郎が登場している。この男性が行った桃太郎昔話の取舍選択からも、教科書桃太郎に駆逐された桃太郎たちの存在を考えることができる。すくなくとも、この男性の中では山行き型桃太郎は「覚えていない」というように、一般の桃太郎に駆逐されている。現代の昔話集に採録されている山行き型桃太郎たちは、教科書桃太郎との生存競争の末

に生き残ったものたちかもしれない。

第5章 山行き型桃太郎の本拠地

第1節 山行き桃太郎の分布

本稿第4章第1節では岡山県で語られているものを山行き型桃太郎の典型話として紹介した。しかし、山行き型桃太郎は岡山県外にも分布している。そこで、山行き型桃太郎の本拠地は、分布の見られる地域のうちのどこであるかについて考察をしていく。その手がかりとして、山行き型桃太郎と類似した地域に伝承され似た性格を示している昔話「大清左」と、それに類似する昔話を使用する。大清左と山行き型桃太郎との分布の関係・内容の関係性についてみていくことで、山行き型桃太郎の本拠地を探る。

まずは、『日本昔話通観』を使用し、山行き型桃太郎の分布を地図で確認する⁽⁵⁾。



図2 中国地方の山行き型桃太郎分布図

図2のように、中国地方の中での山行き型桃太郎の伝承地は、岡山県北西部～鳥取県境に偏っていることが分かる。特に、岡山県新見市に最も多く偏って分布している。この分布が、桃太郎昔話の中でも山行き型桃太郎のみの特徴であることを確認するために、鬼退治型桃太郎の分布図(▲)を作成し、重ね合わせた⁽⁶⁾。

これを見ると鬼退治型桃太郎は、岡山県内では山行き型桃太郎のいない南西部に分布している。他県を見ても、山行き型桃太郎のいない山口県にも分布がある。中国地方全体で見ても、山行き型よりも広い範囲で分布しており、山行き型が岡山県新見市に分布が偏っていることは、山行き型桃太郎独自の特徴であることがわかる。



図3 中国地方の鬼退治型桃太郎分布図(▲)と山行き型桃太郎分布図(●)

第2節 大清左

山行き型桃太郎は、同じく岡山県北部～北西部で語られている「大清左」や「新左」という人物の怪力譚を語る昔話を伝承基盤とし、関わり合いによって成立したと考えられている。まずは、立石氏が「岡山の桃太郎」(立石憲利 2005)に収録している大清左を紹介する。

昔、旗本であった人が、何か失敗があって、三ツ家の土地に来て地着いてなあ、その人が進氏というですなあ。せえで土地の人はみな、お旗本じゃというんで崇めとったんです。ところが、そこが分限者になって、大きな酒屋になりましたなあ、造り酒屋になりましたなあ、造り酒屋に。そこに清左という奉公人がおったんですなあ。それが大清左いうて、昔の人あ六尺男いうたらとても大きな大男じゃったいうんです。せえで雲助でも六尺じゃったいうんです。それが清左は六尺五寸もある大きなおおきな大男でなあ、一遍にご飯を一升炊えて食べて、鍋を洗ろうてお湯にして飲みようたんです。それでもう、お嫁さんをもらおういうても、嫁にくる人がねえ、あんまり化け物みとうように大きな男じゃから。それに力が強いでしょう、恐れて。ところが、大清左の妹娘に、お吉いう娘があって、そのお吉が、また兄に似てとっても大きいんで、男より大きいんで、普通のひとは三尺八寸の着物なら女が普段着になるのに、そのお吉は四尺仕上げでなけにゃあ着物が着れんような女じゃったいうんですなあ。ところが、その兄弟が非常に力持ちで、せえで三ツ家の酒屋の旦那が、

「清左、お前は、米をやるから、お前が一遍にもって去ぬんじやったら、三俵でも五俵でも何俵でもやるからなあ、とにかく力の限り米をもって帰ってみい」

いうて旦那が言われたいうんですなあ。旦那は二俵も負やあええと思うとったんですなあ。

「へえ、そんなら私が持って帰ったら、とにかくどうににいしてでもよろしいか」

「そりゃあどうでも、お前の智恵かぎりで荷造りうして去ねえ。そうすりゃやるから」

「そうかな、そんならいただきます」

昔の三斗五升俵をなあ、二間梯子にゃあ十二本子があるんだそうですが、そりょうどういうように荷造りうしましたかなあ、二間梯子に十一俵米を括りつけて、そりょう負うたいいうんですなあ。せえで旦那あびっくりしてなあ、ほかの奉公人に、

「途中でもし降えたらやらんから、家の庭の口(玄関口)う入るまで行って番をして来い。奉公人が一人じゃあ嘘をいうたらいけんから、女中と二人ついていけ」

いうて、奉公人と女中と二人ついていったら、三ツ家川原まで去んだ時に、光ツ家川原へ、ごそりごそり川原へ降りていったいうんですなあ。何をするじゃろうか思うて、大方降ろすに違えない、ここで十一俵取り返せる思うて、その奉公人がついて行ったところが、その川原へ行行って低うなるんだそうです。そしたら、うんこをしてなあ、ありゃ、何うしょうか思うたら、うんこをしょうる思うたら、そこへ犬が来て、その犬あ頭あつかまえて尻うぬぐうて、そしてまたむっくり起き上がって、持って帰った。せえで、その兄がまあ、そねえな力持ちじゃったんですなあ(立石憲利 2005: 92)。

また、神郷町高瀬で採録された大清左の類話として、新左も紹介されている。新左も大清左と同じで大家の下男として働いていた大男で人間離れた怪力を強調されている話である。

この新左は、「屋根替え用の縄をなうように旦那から言いつけられ、一夜で全てを綱った」「山で薪を取って帰るが、大木のまま持ち帰るので、通り

道の家々は壁などがこわれてしまった」(立石憲利 2005: 95) という内容の類話がある。奉公人という属性、大力持ち、縄緬いというように共通点が多く、大清正系の昔話であるといえる。

ほかに、『日本の民話 15 岡山・出雲編』(稲田浩二 石塚尊俊 岡義重 小汀松之進 1976: 48~54) では「大清正の話」が収録されている。大清正も他の2人と同じく常人離れした怪力であり、その怪力を聞きつけた新家に雇われることで下男として働くことになる。そして「山仕事を命じられるが寝るばかり。そして夕暮れ時に起きて5、6人分の仕事をして帰る」「屋根替えが始まるが、昼寝をしたり子供と遊んだりと全く仕事をしない。主人がいらいらしていると、「まにあえばいい」といって、たちまち屋根替え用の縄をすべて1人で緬う」「退職金として米俵を8表担ぎ、一度も降ろさず帰っていく」というように、大清正・新左と同じような要素と怪力を備えている。

このように、怠惰・豪胆で大力持ちなのが大清正たちである。この昔話には、同じ地域で語られている山行き型桃太郎と似た要素が確認できる。例えば、通常1人ではできない仕事を行う部分は、山行き型桃太郎が1人で大木を引き抜く部分とよ

く似ている。「屋根替えが始まるが、昼寝をしたり子供と遊んだりと全く仕事をしない。主人がいらいらしていると、たちまち屋根替え用の縄をすべて1人で緬い終わる」という部分は、「怠惰な性格の持ち主である」という性格を現わしており、山へ入っても中々仕事をせず、帰るころに大木を引き抜く部分とよく似ている。

また、昔話そのものの性格も似ている。本稿4章第3節で述べたように、山行き型桃太郎は笑い話として分類される。同じく大清正も、日本昔話通観では「笑い話」に分類されている。「昔話の生成—その伝承・伝播を通じて」(稲田浩二 1968: 59~77) の中で稲田氏は大清正について「伝説的な笑話「大清正(又は「大清正」)(力くらべ)としても流行している。」と述べている。

主人公たちの性格や昔話そのものの性格、要素に共通点があることから、山行き型桃太郎と大清正には、内容面で少なからず繋がりが認められる。

第3節 大清正・類似の分布

以上で紹介した「大清正」「新左」「大清正」はいずれも岡山県内で語られている昔話である。しかし、これらの類話は岡山県だけでなく、鳥取・

表1 中国地方の力持ちを語る昔話

		名前	属性	伐採	牛馬を担ぐ	怠け・ノ切 間際の仕事	荷担ぎ	野菜	籠担ぎ・ 宙づり	その他・補足
1	岡山県	真庭郡川上村粟住	おうせいざ 奉公人	×	○	○	○	○	○	洪水と押し比べをする。
2		真庭郡川上村鍛冶屋	おおせいざ 奉公人	○	×	×	×	×	×	伐採した大木で門を壊す。
3		真庭郡川上村鍛冶屋	千造		×	○	×	×	×	雨が降ってきたので、風呂桶ごと人を移動させる。
4		哲西町川南			○	○	×	×	×	牛馬の他に大八車を担いでいる。
5		新見市神郷町高瀬	新左		○	×	○	×	×	大木で門を壊す。洪水の際、一人で石橋を架ける。
6		邑久郡			×	×	×	×	○	実話として伝承される。
7		勝田郡奈義町	くろべえ		○	○	×	×	×	因幡の相撲取りと力比べをする。
8		勝田郡奈義町滝本	吉光黒兵衛		○	×	×	×	×	因幡の相撲取りと力比べをする。
9		上房郡賀陽町			×	○	×	○	×	
10	鳥取県	東伯郡東伯町榎下	ちゃっちゃ長兵衛 奉公人	×	×	○	×	×	○	
11		東伯郡赤崎町太一垣		○	×	×	×	×	×	
12		東伯郡東伯町別宮	大釜の才兵衛		○	×	×	×	×	牛にぶつかると、牛の方が倒れる。
13	島根県	漣摩郡温泉津町	嫁	×	○	×	×	×	×	雨が降ってきたので、風呂桶ごと人を移動させる。
14		飯石郡頓原町宇山	にがきゅうざ 下男	○	○	○	×	×	×	文書を持って行くお使いで、門錠を持って行く天邪鬼。
15		飯石郡頓原町佐見	にがきゅうざ 奉公人	×	×	○	×	×	×	3人1組で仕事をしているが、主人公が大変な部分を担当。
16		飯石郡頓原町佐見	にがきゅうざ 奉公人	○	×	○	×	×	×	1人で川に橋をかける。
17		飯石郡頓原町佐見	にがきゅうざ		×	×	×	×	×	文書の代わりに門錠を持って行く天邪鬼
18	広島県	山県郡大朝町岩戸	サンブイチ		○	×	×	○	×	他話の荷担ぎは米俵だが、この話は塩俵になっている。
19		甲奴郡上下町	丑之助	奉公人	○	×	×	○	×	
20		甲奴郡総領町	牛衛門 若衆	○	○	×	×	×	×	伐採で獲得している大木が、牛馬の機能も果たしている。

鳥根県でも採録が確認できる。また、この地域には、大清算以外にも力持ちが存在している⁽⁷⁾。

中国地方の力持ちを語る昔話を表にしたものが表1である。物語中の要素を抽出し、ある場合は○、無い場合は×をつけて、それぞれの話の共通項を可視化した。物語の要素の抽出は、「大清算」を基準とした。

それぞれの要素について説明する。「伐採」は、普通1人ではできない規模の山仕事や田畑の開墾・草刈りをを行っている要素である。「牛馬を担ぐ」は、文字通り牛馬を主人公が担いで歩いたり、道を譲ったりする。「怠け・メ切間際の仕事」は、なかなか仕事をしない主人公が、メ切直前や一夜で仕事を終わらせる。「荷担ぎ」は主に米俵で、常人ではありえない数の俵を簡単に担いでしまう。「野糞」は「荷担ぎ」を行った場合に出現することがあり、大量の荷を抱えたまましゃがみこんで野糞をする。「籠担ぎ・宙づり」は、主人を乗せた籠を橋の欄干を支点としてつるし、主人を驚かす。力の面でもモラルの面でも、常識から外れていることを現わしているのが、本稿の表で抽出した6種類の要素である。

この要素は、大清算に含まれている要素であるとともに、大清算以外の力持ちを語る昔話にも含まれる要素である。そのため、表1から大清算に似た昔話を判断するために、

- 1、主人公は奉公人・下男等使用人という属性であること
- 2、メ切間近になって大量の仕事をこなすこと（怠惰な性格が見られること）
- 3、主人の籠を1人で担ぎ、道中で籠を宙づりにして脅す（驚かす）
- 4、米俵を担いだまま野糞をすること

という4つの特徴を手掛かりにした⁽⁸⁾。表1では大清算・類似昔話に分類したものには色を付けて区別している。そして、地図上に▲を力持ちを語る昔話、●を大清算・類似昔話というように図示した⁽⁹⁾。

この図4の分布図から分かるように、力持ちを語る昔話は、大清算・類似昔話に比べて広い範囲で確認できる。一方、大清算・類似昔話は、『日本



図4 中国地方の大清算・類似昔話(●)とその他の力持ちを語る昔話(▲)分布図

昔話通観』内の少ない採録数でみても、過半数が岡山県北西部から鳥取県境に偏っている。この分布は、図3で示した山行き型桃太郎と似ていることがわかる。

両者の分布の偏りにも、大清算と山行き型桃太郎には繋がりが認められる。

第4節 四国地方の山行き桃太郎の分布

中国地方では、山行き型桃太郎の分布の様子と、大清算・類似昔話の分布が類似していることが分かった。では、四国地方においても同じ傾向が見られるかについて確認したい⁽¹⁰⁾。

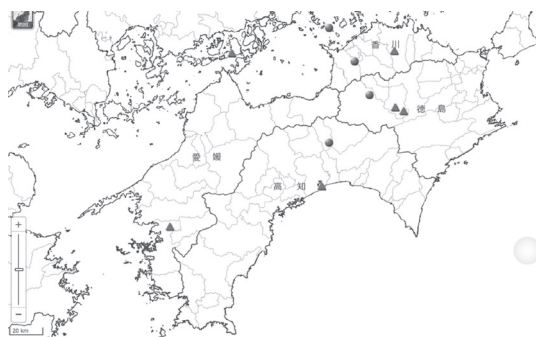


図5 四国地方の鬼退治型桃太郎(▲)、山行き型桃太郎(●)、猿蟹合戦と混ざった桃太郎(×)分布図

これは、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第21巻 香川 徳島』(同朋社、1978年)、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第22巻 高知・愛媛』(同朋社、1979年)に採録されている桃太郎の分布である。鬼退治型桃太郎が6話採録されているのに対し、山行き型桃太郎は4話(●)であり・猿蟹合戦が混ざった桃太郎は1話(×)である。また、猿蟹合戦が混ざった桃太郎は愛媛県

桃太郎、瀬戸内海を渡る 一山行き桃太郎の伝播を中心に

表2 四国地方の力持ちを語る昔話

		名前	属性	伐採	牛馬を担ぐ	怠け・×切間際の仕事	荷担ぎ	野糞	籠担ぎ・宙づり	その他・補足
1	香川県	香川郡香川町	じゆす	奉公人	×	×	×	×	○	
2	徳島県	美馬郡一宇村古見	やぶれ笠	相撲取り	×	×	×	×	×	石臼を担ぐ姿に人々が驚く
3		三好郡西祖谷山村重末	吉の木左衛門		○	×	×	×	×	山を開墾・商人に富をもたらす。
4		東宇和郡宇和東町東多田	古次右衛門	奉公人	×	×	×	○	×	力比べが物語の中心。
5	愛媛県	八幡浜市日土町	赤丑	奉公人?	×	×	×	×	○	和尙の籠担ぎを総代から依頼されているため奉公人?
6		八幡浜市日土町森山	赤陣太	奉公人?	×	×	×	×	○	和尙の籠担ぎを世話役から任命されているため奉公人?
7	高知県	安芸郡芸西村馬ノ上瓜生谷	半七	雇われ	○	×	×	×	×	

『日本昔話通観』21・22巻を使用し作成。

でのみ採録例があるのも特徴のひとつである。

それでは四国地方の分布にも、中国地方の場合と似た偏りがあるか確認していこう。

まずは、表1と同じ方法で作成した四国地方の力持ちを語る昔話の表を確認する⁽¹¹⁾。

表1と同じく、色を付けたものが大清左類似昔話である。伝承数は少ないが、大清左の特性を持った話は存在している。

中国地方の場合と同様に、表の分類を地図上に図示したものが図6である。この分布と図5とを比べてみると、香川県のみが、大清左類似昔話と山行き型桃太郎を兼ね備えていることがわかる。それ以外の県では、同じ地域に両者が同時に分布しているものがない。四国地方の中で唯一山行き型桃太郎が採録されていない愛媛県に、香川県以外の2話の大清左類似昔話が分布している。

中国地方における山行き型桃太郎と大清左・類似のあり様と、四国地方における山行き型桃太郎と大清左類似昔話の分布のあり様を比べると、山



図6 四国地方の大清左類似昔話(●)とその他の力持ちを語る昔話(▲)分布図

行き型桃太郎と大清左は、中国地方において強い結びつきを持っているといえる。

第5節 話の内容からみる違い

分布の特徴の違いの他に、話の内容から見る特徴の違いについても検討してみよう。

中国地方で語られている大清左・類似昔話と、

表3 中国・四国地方の大清左・類似昔話

		名前	属性	伐採	牛馬を担ぐ	怠け・×切間際の仕事	荷担ぎ	野糞	籠担ぎ・宙づり	その他・補足	
1	岡山県	真庭郡川上村粟住	おうせいざ	奉公人	×	○	○	○	○	洪水を押し比べをする。	
2		真庭郡川上村鍛冶屋	おおせいざ	奉公人	○	×	×	×	×	伐採した大木で門を壊す。	
3		新見市神郷町高瀬	新左		○	×	○	×	×	大木で門を壊す。洪水の際、一人で石橋を架ける。	
4		邑久郡			×	×	×	×	○	実話として伝承される。	
5	鳥取県	東伯郡東伯町槻下	ちゃっっちゃ長兵衛	奉公人	×	×	○	×	×		
6	島根県	飯石郡頓原町宇山	にがきゆうざ	下男	○	○	○	×	×	×	文書を持って行くお使いで、門錠を持って行く天邪鬼。
7		飯石郡頓原町佐見	にがきゆうざ	奉公人	×	×	○	×	×	×	3人1組で仕事をしているが、主人公が大変な部分を担当。
8		飯石郡頓原町佐見	にがきゆうざ	奉公人	○	×	○	×	×	×	1人で川に橋をかける。
9		飯石郡頓原町佐見	にがきゆうざ		×	×	×	×	×	×	文書の代わりに門錠を持って行く天邪鬼
10	広島県	山県郡大朝町岩戸	サンブイチ		○	×	×	○	○	×	他話の荷担ぎは米俵だが、この話は塩俵になっている。
11	香川県	香川郡香川町	じゆす	奉公人	×	×	×	○	×	○	
12	愛媛県	八幡浜市日土町	赤丑	奉公人?	×	×	×	×	×	○	和尙の籠担ぎを総代から依頼されているため奉公人?
13		八幡浜市日土町森山	赤陣太	奉公人?	×	×	×	×	×	○	和尙の籠担ぎを世話役から任命されているため奉公人?

『日本昔話通観』17・18・19・20・21・22巻を使用し作成。

四国地方で語られているものには、話の要素の数に違いが見られる⁽¹²⁾。

表3から分かるように、中国地方の大清左・類似昔話は、大清左としての4種類の特徴のいずれかを持つ他にも、大力持ちとしてのエピソードを語る要素が併せて語られており、2つ以上の力持ち要素で物語が構成されていることがわかる。

これに対して四国地方の大清左類似昔話は、1種類の要素のみを語っていることが特徴と言える。表3の11番「じゅす」表3の12番「赤丑」表3の13番「赤陣太」は1人で籠を担ぎ、主人にあたる人物を脅かすという要素のみを語る昔話である。四国地方では1種類の力持ち要素のみで話が完結していることが分かる。

このような状況になっている経緯には2通りが考えられる。ひとつの仮説は、中国地方から大清左が四国地方に伝わる際、要素が削げ落ちて語られた場合。もうひとつの仮説は、四国地方の力持ちたちが中国地方に伝わったときに、他の要素が複合された場合である。

中国地方から四国地方へと伝わった際に要素が削げ落ちると仮定した場合、「籠を1人で担いで、主人を驚かす(脅す)」という要素が残っていることが分かる。なぜこの部分ばかりが残るのか、確実なことはわからない。しかし、江戸期の桃太郎の特徴について述べた滑川氏の意見は参考になる部分があると考えられる。滑川氏は、大石や沢庵石を持ち上げる怪力の桃太郎たちについて、「権力に対して力弱い庶民の「力」への願望をここに読み取ることができよう」(滑川道夫 1981: 15)と述べている。使用人という属性を付与されている大清左・類似昔話の主人公たちが、籠に乗っている目上の相手を驚かす部分は、力弱い庶民の「力」への願望を間接的に叶えてくれている部分だったために、要素として強く残りやすかったのではないか。

中国地方から伝わる際に昔話の要素が削げ落ちるといふ現象は、大清左だけでなく、山行き型桃太郎でも同じことが言える。以下の表4を見て、それを確認する⁽¹³⁾。

山行き桃太郎の典型例として挙げた話には、木を置く場所をどこにすればよいかという問答が、桃太郎と爺との間で行われている。この問答を「木

置き問答」とする。この要素についてみると、分布が偏っている鳥取県・岡山県・島根県の山行き型桃太郎(表4の1~14番)では、10/14話にこの要素が含まれており、問答のない話は4話しかない。反対に、分布の偏りから離れた地域の山行き型桃太郎(表4の15~22番)話を見てみると、木置き問答は行われていない。

山へ行くのを渋る時に行われる、誘引者との「行きましょう」「○○がない(から行かない)」という「山行き問答」も、表4の1~14番では10/14話この問答が含まれており、問答のない話は4/14話しかない。反対に、表4の15~22番地域の話を見てみると、5/9話で問答が確認できるが、欠落している話の割合が4/9話と、表4の1~14番地域に比べかなり欠落している割合が多い。

山へ入っても仕事をせず怠けている場面についても、表4の1~14番では11/14話に含まれており、欠落している話は3/14話しかない。反対に、表4の15~22番地域の話を見てみると、5/8話でこの場面が確認できるが、欠落している話の割合が4/8話と、やはり欠落の割合が多い。

本稿5章第2節で述べたように同じ笑い話に分類される大清左・類似昔話と山行き型桃太郎には、「主要伝承地から離れると要素が欠落する」という共通点があることがわかる。

第6節 山行き型桃太郎の伝承基盤

山行き型桃太郎と大清左・類似昔話は、中国地方の分布における数の多さと偏りの類似性から、ともに中国地方が本拠地であると考えられる。分布が少なく偏りの類似性も見られない四国地方は、後から話が伝わったのではないかと考えられる。

また、中国地方で語られている昔話の内容の特徴と四国地方で語られている昔話の内容の特徴を比較すると、四国地方では要素の欠落が見られることが分かった。話の崩れ方の比較でみても、中国地方の方が本拠地である可能性が高いといえるだろう。

例外的ともいえる遠隔地として、『日本昔話通観 第10巻 新潟』(稲田浩二 小沢俊夫編 1984)には、南蒲原郡に1話のみ山行き型桃太郎が分布している。この山行き型桃太郎も、四国地方と同じく「木置き問答」「山行き問答」が欠落しており、

桃太郎、瀬戸内海を渡る 一山行き桃太郎の伝播を中心に

表4 中国・四国地方の山行き型桃太郎

		出生	怠惰	誘引者	山行き問答 (回)	山行き問答 (物)	山中での 怠け	木	木置き 問答	鬼退 治	終わり方	補足
1	島根県	八束郡八束町二子	果生型 (取納)	○	友達	○ (3)	○	○	○	○	大木に置き負傷した婆を、鬼の生き肝で治療した。	婆の治療の為、鬼の生き肝を求めて鬼退治へいった。
2		東伯郡関金町松河原	果生型 (取納)	×	学校の友達	×	○	○	×	×	怪力を見ても爺婆が喜ぶ。鬼退治に出かける。	桃太郎は学校に通っている。
3	鳥取県	西伯郡会見町	果生型	○	村人	×	○	○	×	○	大人になって鬼退治に行き、宝物を獲得。	無理矢理山仕事へ連行される。鬼退治は一般と同じお供。
4		日野郡日南町神戸上	果生型 (取納)	○	きじの小太郎	○ (4)	○	○	○	×	置き場がないほどの大木に爺が驚く。	言い訳をする度に、小太郎が作ってくれる。
5		川上郡成羽町小泉	果生型 (取納)	○	近所の人	○ (3)	○	○	○	○	鬼退治に行き、宝物を獲得。	鬼退治のお供は、臼・ドングリ・蟹 猿猴的なお供。
6		阿哲郡神郷町下神代	/	○	爺婆	準備に2時間	○	○	○	×	大木を置く場所がなかった。	言い訳は無いが、準備に過剰な時間をかけるため、怠惰○とする。
7		阿哲郡神郷町三室	/	○	不明	○ (2)	○	○	○	×	置き場がないので、川に流した。	/
8		阿哲郡神郷町三室	/	○	隣の若者	○ (3)	○	○	○	×	置き場がないので、川に流すと地震が発生。	/
9	岡山県	阿哲郡神郷町	果生型 (取納)	○	友達	○ (3)	○	○	○	○	置き場がないので、淵に捨てる。その怪力を殿様に買われ、鬼退治。	鬼退治は一般と同じお供。
10		阿哲郡哲西町川南	果生型 (取納)	○	友達	○ (7)	○	○	○	×	木小屋に置くと、木小屋がとんでしまう。	/
11		阿哲郡哲西町川南	果生型	○	隣の息子	○ (5)	○	○	○	×	置き場がないので、山へ投げおろす。大量の薪が採れた。	/
12		新見市井倉	果生型 (取納)	○	爺	○ (3)	○	○	×	×	大きな東に、爺はじっくりと婆はばっくりして死亡。	/
13		新見市下熊谷	/	○	村人	○ (3)	○	○	○	○	置き場がないので、川に捨てる。その怪力が殿様に知れ、鬼退治。	鬼退治については語らない。
14		真庭郡美甘村河田	果生型 (取納)	×	自主的	×	×	○	×	○	カドに大木を投げる。その怪力が殿様にしれ、鬼退治。	/
15	兵庫県	美方郡温泉町海上	果生型	×	自主的	×	×	○	×	○	怪力を見ても爺婆が喜ぶ。鬼退治に出かける。	鬼退治は一般の3獣に臼・栗・杵が加わり、鬼が猿にすり替わる。
16	広島県	安芸郡矢野町	/	○	皆	○ (3)	○	○	×	×	大木を抜いて帰った。	持ち帰った後の描写なし。
17		尾道市向島東	果生型	×	2, 3人	×	×	○	×	×	大木を抜いて帰った。	持ち帰った後の描写なし。
18	香川県	仲多度郡多度津町佐柳島長崎	回春型	×	自主的	×	×	○	×	○	大木によって家が倒壊し、爺が立て直す。その後鬼退治へ向かう。	雄と犬がお供。大江山へ鬼退治。道中の老人から酒・豆・アドバイスを買う。
19		三豊郡高瀬町	/	○	友達	○ (3)	○	○	×	○	大木によって家が倒壊し爺婆が死ぬ。クライにのって海へ出て、鬼のいる島へ。	鬼退治が、鬼と相撲をとって負かすという話に変わっている。
20	徳島県	三好郡東祖谷山村名頃	/	○	自主的	×	×	○	×	×	爺に言われたことがきっかけだが、自主的に家の為になることとして山へ行く。	爺に言われたことがきっかけだが、自主的に家の為になることとして山へ行く。
21		三好郡井川町井内谷中津	回春型	○	他所の子	○ (3)	○	○	×	○	怪力を見た爺婆から鬼退治を勧められ、出立。	鬼退治については語らない。
22	高知県	長岡郡本山町古田	/	○	爺	○ (2)	○	○	×	×	大木が門を通らないので地面に置くと、凹む。地下のマンゴノウオが起こって地震。	マンゴノウオはモグラのような生き物。

『日本語通観』17・18・19・20・21・22巻を使用し作成。

新潟県には大清左・類似昔話も確認できていない。そのため、四国地方に対する考え方と同じで、やはり中国地方のほうが本拠地である可能性が高い。

桃太郎研究者の立石氏は、山行き型桃太郎について、「多くの力持ち伝承が、桃太郎に山行き型の性格を与え、話を成長させたのではないとも考えられる。少なくとも力持ちの伝承という基盤

があったから、それに支えられて今日まで山行き型桃太郎が伝承されてきたと考えることができるだろう。」と述べている。(立石憲利 2005: 98)

稲田氏も「『大清造』は備中の『桃太郎』と全く等しく、横着者だがいざといえは力持である。」と、両話の類似性について触れている。(稲田浩二 1968: 76)

また、稲田氏の研究によって、明治19年に真庭郡八束に生れた女性の語る昔話の中に、桃太郎と大清左が共存したことが分かっている。(稲田浩二 1968: 60) この事実からも、両話の本拠地であると考えられる中国地方において、大清左・類似昔話を基盤として山行き型桃太郎が成立し、交流のあった他地域に伝わったという流れを考えることができる。

第6章 話される桃太郎

第1節 語りの場・話の場

前章で新見市一円が山行き型桃太郎の本拠地であると仮定した。現代において昔話の伝承・伝播は、絵本の読み聞かせがその役を担っていることが分かっている。しかし、山行き型桃太郎を描いた読み本の存在は確認できていない。では、口承の昔話とはどのような機会に、どのように伝承・伝播されるのだろうか。

ここでは、「昔話の生成—その伝承・伝播を通じて—」(稲田浩二 1968)を参考にして、山行き型桃太郎がどのような機会に語られ、伝播していったと言えるかについて考えていく。

昔話には2種類の形がある。1つ目は形式的な語りの場で管理・伝承される昔話で、2つ目は世間話としての話の場で伝承されるものである。

1つ目の形式的な語りの場とは、家庭内や村内である。家庭内伝承は、炉端を原則とする。語り手は夜の炉端で昔話を語り、聞き手は夜作業とともに聴く。そして、ただ聞くだけでなく、「あいずち⁽¹⁴⁾」をする。「ああ」や「うん」といった日常会話の中の相槌とは違い、家庭内の語りの場における「あいずち」は、適切なタイミングで行われる。つまり、既に知っている昔話に対してなされるものであり、語り手と聞き手の掛け合いの作業である。さらにこの場の聞き手は、語り手の小さな語り違いに目ざとく反応するし、気に入った話の繰り返しを要求する。それによってまた、掛け合いが行われる。そうして繰り返しているうちに語り手が身に着けるものは、昔話のあらすじや一部分ではなく、昔話そのものである。

このようにして、年長者から若年者へと、家庭内で昔話が伝承されてゆく。村内の場合、聞き手

が隣近所へと聞き歩きをしたり、講などの寄り合いの際に語られたりして村内の共通財産として、年長者から若年者へと伝承されてゆくのである。そのため、形式的な場で語られる昔話は「まるごと」次の語り手へ伝承される。

2つ目の世間話として伝承される「話の場での伝承」は、特定の場所ではなく、村間を移動する者たちによって伝承される。稲田氏は世間師と呼ばれる、行商や大工等村々に赴き、泊ることの多い職能者を例にあげている。このタイプの「話の場の伝承」は、「語りの場の伝承」とは異なり、話し手は移動している。つまり「語りの場」のような繰り返し行われることがなく、そのために決まった「あいずち」(掛け合い)がされることもない。つまり、「まるごと」が伝承されてゆくわけではないのである。

聞き手次第で揺れ動く不安定さがあるのが「話の場の伝承」で、その不安定さは種々の昔話のエッセンスや、話し手の意見・経験を昔話に融合させるきっかけになっている。

このような「話の場の伝承」には笑い話が多い。そして、笑い話が育まれる場所は大人たちによる話し合いの場であり、形式的な掛け合いがないため、我先にと競争するように語りだす。それは、驚きや笑を期待して行われる。本稿4章第2節で、野村氏の紹介した立石氏の語りの様子について触れたが、あれはまさに驚きや笑を期待して行われていたと言えるだろう。そうした場で育まれた笑い話は、世間師など他の土地へ行く者とともに移動したり、家庭内に持ち帰った大人から、子供へと語られてゆく。形式的な語りの場の伝承にくらべて流動的な伝承であるといえる。

第2節 岡山県山行き型桃太郎の場合

「話しの場」の昔話の特徴である「揺らぎ」。これは、山行き型桃太郎にも当てはまる。『日本昔話通観第19巻 岡山』(稲田浩二 小沢俊夫編 1978)に掲載されている山行き型桃太郎のあらすじを、表よりも少し詳しい形でいくつか取り上げて、その揺らぎを確かめる。

〈川上郡成羽町小泉〉

川上から流れてきた大きな桃を婆が持ち帰る。

爺が帰宅し、櫃の中に入れていたので蓋を開くと、中で男の子が機を織っていた。桃太郎と名付けられ成長する。近所の子が山仕事へ誘うが、「鎌を研ぐ」「ワランズをはく」「手ワエをはく」といつて断る。4度目に山へ行くが、昼寝をする。帰りがけに大木の根に小便を掛け、引き抜いて帰る。どこへ置こうかの問答を3度くりかえし、婆は驚く。その後、猿蟹合戦の登場人物とともに鬼退治へ行く（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 109～111）。

〈阿哲郡神郷町三室〉

爺と婆と桃太郎が暮らしている。隣の若者に山仕事へ誘われるが、「はきものがない」「にかわがない」「背当てがない」といつて行かない。やっとな行って、株に座ってしらみを取っている。帰る頃になって、自分の座っていた株を持って帰る。あまりに大きいので置き場がなく、川へ流したが、その時の音で地震が起こった（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 111）。

〈新見市下熊谷〉

大きくなった桃太郎は、力持ちになった。村人が山仕事に誘うと、「わらじを作る」「ニカワを縫う」「鉞を研ぐ」といつてなかなか行かない。やっとな行って、株の上で昼寝をして、昼飯を食い、寝る。帰る頃になって木を根こそぎ倒し、持って帰る。どこにも置き場がないので川に捨てると、その大きな音を聞いた侍が殿様に報告する。桃太郎は殿から鬼退治を命令される（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 113）。

分布の多い新見市一円でみても、鬼退治がある場合と無い場合が混在しており、定まっていない。鬼退治も、猿蟹合戦の登場人物が登場する場合や、当地のお殿様からの命で向かう場合がある。山から持って帰った木の置き場も、木小屋に立てかけたり川へ捨てたりと異なっている。ある程度決まった流れはあるが、「固定された文言」は、山行き型桃太郎には確認できない。ここから山行き型桃太郎は、話の場で伝承される昔話の特徴を持っているといえる。

第3節 四国の山行き型桃太郎の場合

四国の山行き型桃太郎の場合も、岡山県内と同様に揺らぎを確認することができるだろうか。確認してみよう。以下に『日本昔話通観第21巻 香川・徳島』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）『日本昔話通観第22巻 高知・愛媛』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）を使用し、以下に四国地方の山行き型桃太郎5話のあらすじをあげる。

〈香川県三豊郡高瀬町の場合〉

既に爺婆と暮らしており、友達と「柴刈り」の約束をしている。そして、「わらじを作るから」「わらじのヒキソを引いているから」「わらじの緒を立てているから」といつて断る。そののちに山へ入るが、昼寝をする。帰る時間になると、大木を持って家へ帰る。木を家のひさしに立てかけると家が倒壊し、その下敷きになって爺と婆が死んでしまう。残された桃太郎は、瓦礫の中からたらいを見つけ、それで川を下る。海へ出ると島へ着く。島では赤鬼と青鬼が相撲をしており、桃太郎はそれをはやしたてる。2匹の鬼はおこって桃太郎に討ってかかるが、それを海へと投げ飛ばす。そして鬼の宝物を取って帰る（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 155～156）。

〈香川県仲多度郡多度津町佐柳島長崎の場合〉

爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から流れてきた2つの桃を食べて、爺と婆は若返る。子供をもうけ、桃太郎と名付ける。桃太郎は7歳で爺と山へ行き、大石を動かし大木を引き抜いて帰った。木をひさしに立てかけると家が壊れ、爺がおこったので桃太郎は山から木をもってきて家を作る。鬼退治へ行くことになり、爺婆はトキビ団子をくれる。出立し、道中で犬と雉にトキビ団子をやり、お供にする。次に、焚火をしている老人とであい、「大江山へ鬼退治にいく」というと、お神酒と豆を貰う。「鬼の岩屋に豆を投げ入れ、酒を飲ませて酔ったところを討伐せよ」と教えてもらう。じゅんじゅん山の奥の岩屋で、言われたとおりにして、犬と雉とともに鬼を討伐して帰る（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 154～155）。

〈徳島県三好郡井川町井内谷中津の場合〉

爺婆は2人で山へ木を取りに行った。そこで、川上から流れてきた桃を拾い、それを食べたことで婆が桃太郎を身ごもる。並みの子共より育った桃太郎は、よその子から山仕事に誘われる。そして、「棒がない」「鎌がない」「縄がない」と言って断る。翌日の誘いで山へ行った桃太郎は、昼寝をする。帰る頃になって、大きな木を1人で切って帰った。爺婆は、1人で沢山の大きな木持っている桃太郎に驚く。その力があれば鬼征伐に行けるといって、桃太郎も乗り気で、弁当をもって鬼ヶ島へ出立した（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 154～155）。

〈徳島県三好郡東祖谷山村名頃の場合〉

既に爺婆と暮らしている桃太郎は、毎日遊んでいた。ある日、爺に大きくなったのだから家の役に立つことをしろと言われる。夕方になって爺婆が家に居る時、桃太郎は家の為に木を切りに行く。しかし、切り方が分からないので根元から木を引き抜いて帰った。木を家に建てかけると、家が潰れてしまう。婆は雑炊鍋に、爺はメシゾウケに首を突っ込んで死んでしまう（稲田浩二 小沢俊夫編 1978: 516）¹⁵⁾。

〈高知県長岡郡本町古田の場合〉

桃から生まれた桃栗太郎が大きくなったので、爺が山仕事へ誘う。しかし「枝鎌を研ぐ」「チョウノウを研ぐ」といって断る。3回目の誘いで爺と山へ行った桃栗太郎は、大きな木を切って帰る。その木が門を通らないし、立てかけることもできないので地面に置く。すると地面が凹み地下にいたマンゴノウオが怒って地震を起こした（稲田浩二 小沢俊夫編 1979: 160～161）。

以上が、『日本昔話通観』に採録されている四国地方の山行き型桃太郎である。『日本昔話通観』では、徳島県三好郡井川町井内谷中津の例を全文で掲載し、他を「類話」として掲載している。しかし、類話といってもそれぞれかなり個性的な山行き型桃太郎である。これらも、話の場で伝承された昔話だろうと考えられる。形式的な部分は見受けられず、「働かない青年桃太郎は、その時になる

と常軌を逸した働きをみせる」という大筋のみが合致している。四国地方に伝わっているものも、岡山県内の山行き型桃太郎と同様に話の場で、人々の交流の中で伝播し、伝承されてきたと言えそうである。

第7章 岡山・四国間の交流

第1節 交流の機会の一例としての金毘羅参詣

山行き型桃太郎が伝わるのは、話の特徴から考えて、「話の場」であろうことがわかった。それでは、この2つの地域の人々の交流の機会には、どんなものがあっただろうか。稲田氏の研究の例にあるように、大工として四国地方に渡る、もしくは四国地方の大工が岡山に渡ってきて、話を持ち帰ったかもしれない。行商人によるものかもしれない。機会は多様であり得るが、そのうちの1つに、参詣の旅によって伝えられる場合も考えられるのではないだろうか。

この参詣とは、香川県琴平町像頭山に鎮座する金刀比羅宮（金毘羅宮）への参詣である。「讃岐富士を望む天下の信仰みち 金毘羅参詣の道」（市原輝士 2000）によると、金毘羅は、室町時代ごろから、瀬戸内海の海上生活者の間に、海難を救われたという話が伝えられ、主に海の守護神として御利益がある神として信仰された。また、海と縁の薄い地域では、諸願成就の神として認識されていた場合もある。

参詣の様子について『金刀比羅宮 こんびらさんへの招待』（藤田健 2000: 89）では、「参詣が目的の寺社参りの旅といっても、比較的取り締まりが緩やかになるのは、江戸時代も中期以降」だったと述べられており、文化・文政の頃になると関東の人たちは丸亀から、中国・九州方面からは多度津経由を主に全国から参詣者が訪れた。

また、『江戸時代の瀬戸内海交通』（倉地克直 2021）によると、香川県近隣の中国地方は文政・文化の頃より少し早く、17世紀の中頃以降から既に盛んになっていたという。倉地氏は、備讃瀬戸（岡山・香川間の海域）を通行する者のうち、最も多いのは金毘羅参詣の人びとであったかもしれないと述べている（倉地克直 2021: 188）。

岡山県内の参詣の旅について『岡山県史第7巻

桃太郎、瀬戸内海を渡る 一山行き桃太郎の伝播を中心に

近世Ⅱ』(岡山県史編纂委員会編 1985: 547)によると、寺社参詣の旅は一般の旅に比べて寛容視されていたから、多くの庶民が旅に出ていたという。

第2節 新見市一円の金毘羅信仰

金刀比羅宮信仰は、山行き型桃太郎を持つ新見一円にまで広がっていた。このことは、岡山県高梁川流域の金毘羅常夜灯の分布から、確認することができる。高梁川とは、新見市内、鳥取県との県境付近を始流とし、瀬戸内海までを縦断するようにして流れている川である。下図は、山行き型桃太郎の分布図と高梁川流域を図示したものを重



図7 高梁川流域と山行き型桃太郎分布図

表5 高梁川流域両岸約1km以内の金毘羅常夜灯

	所在地	造立年月日		所在地	造立年月日
△	1 総社市下原	不明	36	新見市広瀬	不明
△	2 総社市下原	文化九年申十二月一〇日	△	37 吉備郡昭和町下村	文政甲申歳八月吉日
△	3 総社市富原	文化九壬申五月吉日	38	川上郡成羽町桜丁	不明
△	4 総社市溝口	明治一〇有七年甲申九月吉日	39	川上郡成羽町新張	文化一〇酉年八月吉日
△	5 総社市真壁	文化一〇年癸卯三月吉日	▲	40 川上郡成羽町次ノ丁	文政一子年一〇月吉日
6	総社市中原	不明	△	41 高梁市落合町藤倉	弘化四年丁未六月
△	7 総社市柿ノ木	文化六年己巳冬十月吉祥日	42	川上郡成羽町古松	享和元年六月吉日
8	総社市穴栗	文化九年申三月吉日	△	43 川上郡成羽町佐原	安政四年巳八月吉日
9	総社市穴栗	明治三二年吉日	44	川上郡川上町川合	文政五年午六月一〇日
▲	10 総社市上ノ茶屋	天保七年九月吉日	45	高梁市中組	弘化二年乙巳三月
11	総社市奉正寺	不明	46	倉敷市西阿知町西原	嘉永元年申四月
12	総社市南奈	天保一一年庚子六月吉日	47	倉敷市西阿知町新屋敷	不明
13	総社市南奈	文化一三年子三月吉日	48	倉敷市本町	寛政三年辛亥三月
14	総社市上原	不明	49	倉敷市新通	文政八己酉八月吉日
15	吉備郡昭和町日羽	不明	▲	50 倉敷市玉島円通寺	明和五戌子年六月吉日
△	16 吉備郡昭和町美袋	弘化三丙歳一〇月吉日	△	51 倉敷市玉島円通寺	文化十四丁丑五月
17	吉備郡美袋寺原	文久二壬戌年三月吉日	52	倉敷市東酒津	不明
△	18 昭和町草田	文化六年己巳年九月吉日	53	都窪郡清音村	不明
19	吉備郡昭和町日羽	天保一一年子年一〇月吉日	54	都窪郡清音村	不明
20	高梁市下町	文政一一年戊子初冬	△	55 都窪郡清音村	寛政一一己未年
21	高梁市仲間町	文政一〇丁亥年七月吉日	56	倉敷市連島町西浦	不明
22	高梁市伊賀町	弘化三丙年六月吉祥日	57	倉敷市連島町西浦	なし
23	高梁市奥万谷	天保九戌年一〇月一〇日	58	高梁市駅前	不明
24	高梁市近似	寛政元年己酉一二月吉日	59	小田郡矢掛町平村	明治一三年庚春
△	25 高梁市かじや町	紀元二五三三年	60	小田郡矢掛町藤之棚	不明(天保亥正月?)
△	26 高梁市今津	文化六己巳六月吉日	61	川上郡備中町田原	文化一五年戊寅五月
△	27 吉備郡昭和町草田	文化一一年戊三月吉日	▲	62 小田郡矢掛町慶知庵	天保六歳年
28	総社市豪漢中島	弘化二乙巳一〇月	63	小田郡矢掛町横谷	安政五年戊午初夏
※	29 高梁市今津上組	文政八乙酉九月吉日	64	浅口郡船徳町西谷	文化七年三月吉日
30	高梁市今津上組	不明	△	65 浅口郡船徳町西谷	天保九年戊歳一〇月吉日
31	高梁市今津上組	文政一二年	66	川上郡成羽町下原	文化九年壬申九月吉日
△	32 高梁市高倉	不明	67	小田郡矢掛町東町	文政紀元戊寅冬
33	新見市幸田	文化十五寅六月吉日	68	小田郡矢掛町胡町	文化十四年
34	新見市下長屋	不明	69	高梁市紺屋町	文化十四年丁丑十二月吉日
35	新見市上馬屋	不明	70	高梁市阿部	不明

湯浅照弘「河川水運と金毘羅常夜灯—岡山県高梁川流域の金毘羅常夜灯の分布(中間報告)—」を使用し作成

ねたものである。

図7をみると、山行き型桃太郎の主要分布地域は高梁川流域に属していることがわかる。そして以下の表は、湯浅氏が調査した、高梁川流域に分布する金毘羅常夜灯の所在と造立年月日を表にしたものである。採取地は、高梁川の本流及び支流の成羽川（図7支流上側）と小田川（図7支流下側）の両岸約1km以内である⁽¹⁶⁾。

表5により、33～36番のように高梁川の上流は新見、下流は50・56番のように港のある玉島・連島まで分布していることが分かる。図8は、表5の一部を抜粋したものである。

上流から順に、新見市下長屋（表5番号34）・高梁市今津（表5番号26）・高梁市下町（表5番号20）・成羽町佐原（表5番号43）・昭和町草田（表5番号18）・総社市真壁（表5番号5）・小田郡矢掛町慶知庵（表5番号62）・倉敷市玉島円通寺（表5番号50・51）である。一部抜粋を見ても、流域の上流から下流まで、広く金毘羅常夜灯が分布していることがわかる。

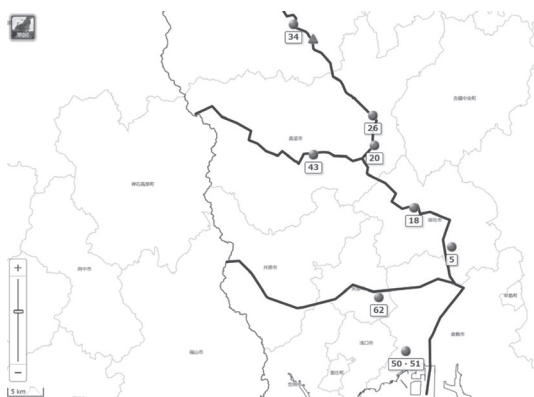


図8 【表5】から抜粋し図示した高梁川流域の金毘羅常夜灯分布地図

湯川氏は「金毘羅常夜灯調査で一つ困難なのは、「金毘羅常夜灯」と銘がないものがあることである。（中略）ぼつねんと建っている常夜灯を発見し、これが果たして地神様か氏神様か、金毘羅の常夜灯を判定することが困難である。」（湯浅照弘 1971: 15）と述べており、判定が困難のために採録されていない金毘羅常夜灯が他にも存在する可能性がある。

また、当該論文の一覧には掲載されていないが、

「高瀬舟船頭と金毘羅信仰」（湯浅照弘 1985: 17）では、湯浅氏によって「新見市谷合地区に金（刀）比羅神社の常夜灯があり…」という報告がされているため、図8では▲で示した。

表5で所在地の頭に付記している▲は、「講中」と記載のある常夜灯である。△は「講中」ではないが「村中」「氏子中」「若連中」等、集団ということが分かる記載のある常夜灯である。湯浅氏は、「村中」等の記載も広い意味での信仰集団で、講によって成り立った集団であるとみなしている。その上で、金毘羅常夜灯建立に必要な資金はこの信仰集団によって賄われたとして、1人や2人の信仰ではなく、ある程度まとまった人数の発意によって金毘羅常夜灯が建立されたとしている（湯浅照弘 1972: 34）。

また、湯浅氏はこれら金毘羅常夜灯の造立年代に注目し、上限は明和5年（1768）で下限は明治32年（1899）であると述べている。そして、「勿論、筆者の岡山県高梁川流域の金毘羅常夜灯を精査したのではない」という断りの上で、調査した常夜灯の造立年代から「高梁川流域の金毘羅常夜灯は、文化、文政天保時代に建立の興隆期をむかえ、弘化期から明治時代において衰退に向かっている」傾向がみられると指摘している（湯浅照弘 1972: 30）。

高知県で同じように金毘羅常夜灯の研究をしている坂本五郎氏の研究結果によって、高知県の常夜灯は安政～慶応期に興隆し、昭和期以降の建立も判明している。このことから、湯浅氏は岡山県高梁川流域の方が高知県よりも金毘羅信仰の浸透が早かったという考えを述べている。その理由のひとつとして、高梁川流域に発達した高瀬舟水運を挙げている。この舟運による流域の人々と讃岐の人々の交流・物流を媒介として、金毘羅信仰が早く高梁川流域に浸透したのではないかと述べている（湯浅照弘 1972: 30）。

他に、常夜灯以外で形ある金毘羅信仰を示すものは、岡山県新見市哲西町矢田にある金毘羅大権現の存在である。『哲西史』（哲西史編集委員会編 1963: 94～97）によると、永享元年（1429）に林宗という僧によって、讃岐の善通寺の末寺としてたてられ、その鎮守として琴平の金毘羅宮が境内にまつられたという。

その後神仏分離によって光祥寺との関係は切り離されたが、以降も信仰は残っていた。旧暦で毎月10日には縁日が定期開催され、特に3月10日の矢田金毘羅縁日にはぎわっていたという記述や写真が残っている。

この矢田金毘羅宮が高瀬舟運隆盛の時代にも存在したことは、『高梁市史』の

「矢田村の光祥寺の金毘羅宮の絵馬に次のような話が伝えられている。元禄のころ、矢田村には数多くの馬が飼育され、それを矢田谷方面の牛飼山に放牧するので、馬が山から出て稲を食い荒らし、被害が大きいので困った。(中略)百姓の迷惑を見るに忍びず、光祥寺に依頼して金毘羅宮へきねんをしてもらった。ところが不思議にそれ以来馬が出ないようになり、被害も少なくなった。庄屋は神の加護のあらたかなるに感じ、絵師に奔馬をつなぎとめた絵馬を書いてもらって奉納したというのである」(高梁市史編纂委員会編 1979: 261)

という記述からわかる。矢田の金毘羅は昭和47年(1972)の水害のため壊れ、絵馬も無くなったと書かれており、『哲西史』に記録されたものが水害直前の様子である。

このように、山行き型桃太郎の主要伝承地である新見市一円と四国地方には、金毘羅信仰という繋がりがあることが分かる。

第3節 参詣に行った記録

山行き型桃太郎の語られる地域が高梁川流域に属しており、流域には金毘羅信仰が広がっていることが分かった。

さてこの高梁川には16世紀に本格化した「高瀬舟水運」と呼ばれる川舟水運網があった。岡山県北西の山間部から瀬戸内海までを縦断している高梁川で栄えた高瀬舟は、流域の物流に大きく貢献していたのである。

この高瀬舟は、荷物ばかりではなく人も乗せることがあり、参詣者たちを運ぶ役割も担っていた。『高梁市史 下巻』(高梁市史(増補版)編纂委員会編 2004: 200)には、「鉄道やトラックによる輸

送が始まるまでは、高瀬舟は物資輸送の中心であったから、荷物ばかりでなく、人も乗せており、伊勢詣りや金毘羅詣りの人たちは好んでこの高瀬舟を利用した」という記述があり、かなり長い間、参詣人が使用していたことがわかる。

また、『新見市史』(新見市史編纂委員会編 1965)では高瀬舟で金毘羅参詣をすることがかなり一般的だったことが伺える事例が紹介されている。寛政11年(1799)は水の少ない年であったらしく、新見と高梁の間にある正田村は用水の不足を理由に井堰を閉め切って通船を許さなかった時期があった。船頭たちが正田村へ通船の許可を問屋経由で願ったが、正田村は応じなかった。そこで船頭は、田植えが終わった後に一度金毘羅船(金刀比羅参詣のための高瀬舟)を出すのは慣例であるから、通船できるように正田村に言い聞かせて頂きたいという願書を、正田村の所属する松山藩(現高梁)へ提出したという。(新見市史編纂委員会編 1965: 283)この記録から、農繁期の終わりには決まって金刀比羅参詣の船が出ていたことがわかるし、新見の人々はわざわざ正田村と所属藩の役所へ通船の願いを出すほどにこの金毘羅船を大事にしていたことがうかがえる。

明治～昭和の時代の参詣の場合は、湯浅照弘の調査からわかる。『岡山県高梁川の舟運習俗: 高瀬舟の船頭』(湯浅照弘 1966: 46～48)では、新見市の谷合地区という高瀬舟船頭の住む地区の調査記録がまとめられている。谷合の人々は一年に一度、当地の総代がオハツオ料を集めて金刀比羅宮へ代参し、御札を貰ってきて各戸に配るというのを大正時代まで行っていたという。

参詣者が好んで高瀬舟を使用したという記述や、農繁期の終わりに金毘羅船が慣例的に出ていたという記述から、徒歩が一般的な交通手段であった時代において高瀬舟は、金刀比羅参詣の主流交通手段だったことがうかがえる。同時に、新見市一円から四国地方へと実際に参詣する機会があったことが確認できた。この旅は岡山・香川の人々の交流の場のひとつとなった可能性がある。

また、本稿7章第2節で述べたように、岡山県が、金毘羅とより近い高知県よりも早い時期に金毘羅常夜灯を建造している場合が多いことについて湯浅氏は、舟運による流域の人々と讃岐の人々

の交流・物流を媒介として、金毘羅信仰が早く高梁川流域に浸透したのではないかと述べている。

この、金毘羅信仰を広めた可能性のある讃岐と備中の人々の交流は、同時に山行き型桃太郎伝播の機会でもあった可能性も大いにある。それは、山行き型桃太郎が、形式的な語りの場ではなく、世間話的な話の場で生きていたと言える昔話だからである。

おわりに

桃太郎昔話は、室町末期～江戸初期にかけて口承の世界で成立したというのが定説である。享保8年（1723）の豆本桃太郎の出版を契機に桃太郎昔話は隆盛し、スタンダードな桃太郎を広げていった。この桃太郎から誕生したものが、教科書桃太郎・岡山桃太郎伝説、そして本稿で取り上げた山行き型桃太郎である。

教科書桃太郎は、国定教科書によって広がりを見せ、桃太郎の正解と間違いを作り出すほど世間一般に浸透した。岡山桃太郎伝説は、難波金之助氏の論をきっかけに、吉備路の観光化とともに盛り上がり、岡山県吉備路の観光の力とともに広げられた。教科書桃太郎と岡山桃太郎伝説は、国や県などの下で広がりを見せたという点で、どちらもこれを拡散しようとした権威が、その背後に存在する。

それに対して山行き型桃太郎は、国が教科書に掲載したわけでもなければ、県が公に取り上げたわけでもない。また、享保以降の桃太郎本のように出版されたものも確認されていない。その背景に話を拡散させようとする権威が存在しなかったといえる。そのような山行き型桃太郎が、発生地とみられている中国地方、特に岡山県北西部から海を挟んだ四国地方に伝わっていることが分かった。

現在岡山県と四国地方を結ぶ本州四国連絡橋、その最初の1本である瀬戸大橋が架かったのは昭和63年（1988）年である（JB本四高速「瀬戸大橋の歴史」[online:rekishi4.html](http://online.rekishi4.html)）。つまりそれ以前は、船で渡るしか往來の方法はなかった。徒歩が一般的な移動手段であった時代において、岡山県と四国地方は今よりも往來が容易ではなかった

と言える。それでも伝播が確認されていることから、山行き型桃太郎は海を渡る人々の交流によって運ばれたことがわかる。

その交流の機会のひとつとして考えらえるのが、金毘羅参詣の旅である。岡山県備中地方に流れる高梁川は、高瀬舟舟運を生み出し、その船頭達によって金毘羅信仰が流域に根付いた。高梁川の存在は高瀬舟舟運で、徒歩に比べ岡山県と四国地方との往來を身近なものにしたこと以外に、瀬戸内海を挟んだ人々の交流を生み出したという点でも、山行き型桃太郎の伝承に大きな影響を与えていると考えて良いだろう。

一般に流布している桃太郎は、口承と書承の2つの方法で現在まで受け継がれてきた。囲炉裏のそばで語られる伝統的な口承文芸という側面も持つが、教科書や江戸期の出版物等、書承が伝播・生存には大きく貢献している。一方、本稿で取り上げた山行き型桃太郎は、出版物による伝承が確認されておらず、口承のみで受け継がれてきている。

中国地方の、特に岡山県北西部が本拠地であると仮定した本稿の立場から見ると、岡山県が熱列にPRしている桃太郎よりも、山行き型桃太郎の方が「岡山の桃太郎」であるといえる。そして、なにかしらの権威に依らず生き抜いてきた、口承文芸らしい昔話である。

注

- (1) 映像を閲覧して作成。データベースも使用して文字にした。
- (2) 学年別の検討では1年生よりも2年生のほうが認知度が高い傾向にあり、大学での学びや実習体験が昔話の認知度に影響していることが示唆された。（向田久美 2012: 1）と述べられている。
- (3) 「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態—1990年からの30年間の変化—」（水野智美 徳田克己 2021: 15）には、DVD視聴率で西洋の昔話のDVD視聴回数が多いのは、ディズニー作品の影響によるものと考えられている。1990年に限っては、も桃太郎は「みにくいアヒルの子」にも次いで4位で

ある。

- (4) 山行き型桃太郎については本稿第4章で述べている。山行き型は教科書の桃太郎とは違い、「怠け者」という特徴がある。また、類話によっては、爺と婆を殺してしまう場合もあり、教科書掲載基準からみると「下品な」桃太郎といえる。
- (5) 『日本昔話通観第16巻 兵庫』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第17巻 鳥取』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第18巻 鳥根』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第19巻 岡山』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）・『日本昔話通観第20巻 広島・山口』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）の6冊を使用して作図。岡山県吉備中央町にも、『岡山「へその町」の民話—岡山県吉備中央町の採訪記録—』（立石憲利 2017: 34~40）によって山行き型桃太郎が採録されている。しかし、『日本昔話通観』以外の文献をここで使用すると、他の都道府県は『日本昔話通観』しか使用していないため、条件がそろわなくなる。そのため、図示していない。吉備中央町は、北西部というより中部よりだが、1人の話者しか確認できていないため、分布が偏っているという事実には変わりはない。
- (6) 『日本昔話通観第16巻 兵庫』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第17巻 鳥取』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第18巻 鳥根』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第19巻 岡山』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）・『日本昔話通観第20巻 広島・山口』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）の6冊を使用して作図。岡山県南部に×があるが、これは鬼退治をする際のお供に、猿蟹合戦登場物が混入している例である。念のため×印を付けたが、鬼退治型桃太郎には変りない。
- (7) 『日本昔話通観第17巻 鳥取』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第18巻 鳥根』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第19巻 岡山』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）・『日本昔話通観第20巻 広島・山口』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）の4冊を使用して作成。兵庫県に力持ちを語る昔話は確認できなかった。
- (8) 牛馬を担ぐという部分について、『日本昔話集成』（関敬吾 1974: 481~482）の「五〇四力較べ」に牛を抱えて殿様行列を避けるという同一のシーンがあることから、力持ち・力較べ昔話としての要素であって大清正に限った特徴ではないと判断した。
- 米俵を担ぐという部分について、大清正は荷物を降ろさないことを条件に大量の米俵を獲得している。そして、河原でしゃがみ込んだ大清正の姿を見て「さすがに降ろすだろう」と思ったら、降ろさずに野糞をしていたというのが、話の重要なポイントである。そのため、荷物を降ろさないまま野糞をするという描写が重要である。大量の荷物を持つだけの場合は、力持ちを語る昔話としての要素であって大清正に限った特徴ではないと判断した。
- 大木を持ち帰る部分について、山行き型桃太郎と共通している内容のため、大清正・類似昔話の重要な要素のように思える。しかし、大木を丸ごと運ぶという要素は、米等荷物を持つ場合と同じく大力持ちであることの象徴であるとも考えられたため、この1要素のみを取って大清正・類似昔話であるとは言えないと判断した。
- (9) 山口県は山行き型桃太郎の分布が確認できないので地図から省いている。
- (10) 『日本昔話通観第21巻 香川・徳島』（稲田浩二 小沢俊夫編 1978）・『日本昔話通観第22巻 高知・愛媛』（稲田浩二 小沢俊夫編 1979）の2冊を使用して作図した。高知県梶原にも鬼退治型桃太郎が、『昭和五十四年度報告書高知県高岡郡梶原昔話集』（大谷女子大学文学研究会 1981）によって確認できる。しかし、注5の場合と同じく、条件をそろえるために図示していない。この章では、山行き型桃太郎と大清正類似昔話の関係性について考えているため、鬼退治をする梶原の桃太郎の図示が無くても、支障はないと判断した。

- (11) 『日本昔話通観第21巻 香川・徳島』(稲田浩二 小沢俊夫編 1978)・『日本昔話通観第22巻 高知・愛媛』(稲田浩二 小沢俊夫編 1979)の2冊を使用して作成した。
- (12) 表の色は、分類ではなく行を目で追いややすくするため。
- (13) 『日本昔話通観第17巻 鳥取』(稲田浩二 小沢俊夫編 1978)・『日本昔話通観第18巻 島根』(稲田浩二 小沢俊夫編 1978)・『日本昔話通観第19巻 岡山』(稲田浩二 小沢俊夫編 1979)・『日本昔話通観第20巻 広島・山口』(稲田浩二 小沢俊夫編 1979)・『日本昔話通観第21巻 香川・徳島』(稲田浩二 小沢俊夫編 1978)・『日本昔話通観第22巻 高知・愛媛』(稲田浩二 小沢俊夫編 1979)の6冊を使用して作成。
表内の「出生」について「(収納)」と付記してあるものは、桃から生まれる果生型であるが、戸棚や櫃に収納するという行為を経て生まれているものである。
- (14) 論文中において、相槌ではなく「あいずち」と記述されているため、それに従う。
- (15) 「木切り桃太郎」として立項されている。
- (16) 順番は原著に従っている。
- 巻 島根』株式会社同朋社
稲田浩二 小沢俊夫編 1979『日本昔話通観第19巻 岡山』株式会社同朋社
稲田浩二 小沢俊夫編 1979『日本昔話通観第20巻 広島・山口』株式会社同朋社
稲田浩二 小沢俊夫編 1979『日本昔話通観第21巻 香川 徳島』株式会社同朋社
稲田浩二 小沢俊夫編 1979『日本昔話通観第22巻 高知・愛媛』株式会社同朋社
稲田浩二 1968「昔話の生成—その伝承・伝播を通じて」『日本文学』17-7
大田邦郎 2017「日本に開ける小学校数と学校規模の変遷について」『千葉大学教育学部研究紀要』65
岡山県史編纂委員会編 1985『岡山県史第7巻 近世Ⅱ』岡山県 国立国会図書館デジタルコレクション online: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9575928> (2023.1.6)
桂井和雄編 1977『全国昔話資料集 23 土佐昔話集』岩崎美術社
加原奈穂子 2015「地域アイデンティティ創出の核としての桃太郎—岡山県における桃太郎伝説の事例から—」『日本民俗学』236
加原奈穂子 2008「伝説化される昔話—岡山の桃太郎伝説と難波金之助—」『岡山民俗』227
金港堂書籍株式会社編『尋常小学修身訓 巻1』金港堂 国立国会図書館次世代デジタルライブラリー online: [https://lab.ndl.go.jp/dl/book/756868?keyword=『尋常小学修身訓 &keyword= 巻1』](https://lab.ndl.go.jp/dl/book/756868?keyword=『尋常小学修身訓&keyword=巻1』) (2023.1.3)
倉地克直 2021『江戸時代の瀬戸内海交通』吉川弘文館
沢井耐三 2011「『猿蟹合戦』の異伝と流布 —『猿ヶ嶋敵討』考—」『近世文藝第』93
Japanknowledge Lib『日本国語大辞典』赤本 online: <https://sslvpn2.kuas.ac.jp/proxy/62204b23/https/japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000010870> (2022.12.13)
Japanknowledge Lib『デジタル大辞泉』赤本 online: <https://sslvpn2.kuas.ac.jp/proxy/62204b23/https/japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001000130300> (2022.12.13)

引用および参考文献

- 大谷女子大学文学研究会 1981『昭和五十四年度報告書高知県高岡郡梶原昔話集』大谷女子大学文学研究会
- 市原輝士 1981「讃岐富士を望む天下の信仰みち 金毘羅参詣の道」山本大編『日本の街道7 海光る瀬戸内・四国』52~57 集英社
- 稲田浩二 石塚尊俊 岡義重 小汀松之進 1976『日本の民話15 岡山・出雲編』株式会社ほるぷ
- 稲田浩二 小沢俊夫編 1984『日本昔話通観第10巻 新潟』株式会社同朋社
- 稲田浩二 小沢俊夫編 1987『日本昔話通観第16巻 兵庫』株式会社同朋社
- 稲田浩二 小沢俊夫編 1978『日本昔話通観第17巻 鳥取』株式会社同朋社
- 稲田浩二 小沢俊夫編 1978『日本昔話通観第18

- JB 本四高速「瀬戸大橋の歴史」online: <https://www.jb-honshi.co.jp/seto-ohashi/shoukai/rekishi4.html> (2023.1.8)
- 関敬語 1974『日本昔話集成』角川書店
- 高梁市史(増補版) 編纂委員会編 2004『高梁市史 下巻』高梁市
- 高梁市史編纂委員会編 1979『高梁市史』高梁市 国立国会図書館デジタルコレクション online: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9574532> (2023.1.6)
- 立石憲利 2005「岡山の桃太郎」岡山県デジタルミュージアム編『桃太郎は今日も元気だ』吉備人出版
- 立石憲利 2017『岡山「へその町」の民話—岡山県吉備中央町の再訪記録』吉備人出版
- 立石憲利編 2006『桃太郎昔話—みんな違って面白い—』吉備人出版
- 哲西史編集委員会編 1963『哲西史』哲西町
- 天理図書館 2011「やまとの名品」『陽気』2011—9 養徳社
- 徳田克己 水野智美「家庭における幼児の童話・昔話離れ現象の実態—1990年からの30年間の変化—」『実践人間学』12号
- 滑川道夫 1981『桃太郎像の変容』東京書籍
- 新見市史編纂委員会編 1965『新見市史』新見市 国立国会図書館デジタルコレクション online: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3015190> (2023.1.6)
- 野村純一 2002『柳田国男未採択昔話聚稿』瑞木書房
- 野村純一 2011「新・桃太郎の誕生—日本の「桃ノ子太郎」たち—」野村純一著作集編集委員会『桃太郎と鬼—野村純一著作集第三巻—』成文堂出版
- 第13回桃太郎サミット高松大会実行委員会 2014 橋本仙太郎「童話 桃太郎の発祥は讃岐の鬼無」(復刻版) 第13回桃太郎サミット高松大会実行委員会
- 花部英雄 2021『桃太郎の発生』三弥井書店
- 藤田健 2000『金刀比羅宮 こんびらさんへの招待』筑摩書房
- 文化庁「日本遺産ポータルサイト」online: <https://japan-heritage.bunka.go.jp/> (2022.1.6)
- 皆川晶 2018「昔話の認知度について—アンケート調査の分析を中心に—」『近畿大学九州短期大学研究紀要』48
- 向田久美子 2012「日欧の昔話の認知度(1)—短期大学生の学年別検討—」『駒沢女子短期大学研究紀要』45
- 文化庁『桃太郎伝説』の生まれたまち おかやま～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～ online: <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story064/> (2023.1.6)
- 山崎舞 2018「昔話「桃太郎」の変転:『再板桃太郎昔話』の諸問題を中心に」『玉藻』52
- 湯浅照弘 1971「岡山県高梁川流域の金毘羅常夜灯の所在(Ⅱ)」『西郊民俗』57
- 国立国会図書館デジタルコレクション online: <https://dl.ndl.go.jp/pid/6064303> (2023.1.6)
- 湯浅照弘 1972「河川水運と金毘羅常夜灯—岡山県高梁川流域の金毘羅常夜灯の分布(中間報告)—」『日本民俗学』79
- 湯浅照弘 1985「高瀬舟船頭と金毘羅信仰」『西郊民俗』111 国立国会図書館デジタルコレクション online: <https://dl.ndl.go.jp/pid/6064358> (2023.1.6)
- 湯浅照弘 1966『岡山県高梁川の舟運習俗:高瀬船の船頭』岡山県農協印刷 国立国会図書館デジタルコレクション online: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9545142> (2023.1.6)
- 古里紅子「桃太郎」まんが日本昔ばなし～データベース～ online: <http://nihon.syoukokuai.com/modules/stories/index.php?lid=1159> (2023.1.6)
- 立命館大学アート・リサーチセンター「ArtWiki」『桃太郎 後日断』online: <https://www.arc.ritsumei.ac.jp/artwiki/index.php/>『昔話桃太郎』続編 (2023.1.9)
- 立命館大学アート・リサーチセンター「ArtWiki」昔話桃太郎【桃太郎作品一覧】online: <https://www.arc.ritsumei.ac.jp/artwiki/index.php/昔話桃太郎#> (2023.1.9)